

---

# セカンド・ハート

ルイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セカンド・ハート

### 【Nコード】

N7430G

### 【作者名】

ルイス

### 【あらすじ】

便利屋ギルド『テイルヴィング』に属する少年、『ハンス・ターキンス』。同僚や同業者と共に気ままに依頼をこなす日々を送っていたが、偶然にもある一本の剣を手にした事で途方もない争いに巻き込まれることになる。剣の正体とは？暗躍する男は何者なのか？そして、『セカンド・ハート』とは何なのか？彼とそして仲間達は、生き残ることが出来るのか？すでに車輪は動き始めている。

## プロローグ

雨が、ひたすらに降り落ちる暗い街。石床に叩きつけられた無数の雨粒が煩い位の騒音を轟かせている。

周りには暗い闇に溶け込むような黒い石作りの建造物が立ち並んでいる。

民家だろうか。黒と化した世界の中に、僅かではあるがポツポツと寂しげな灯りがついている。道を行く明かりとしては、随分と頼りない限りだった。

まるで、目のようだ。

暗い闇に隠れて生きる者を、ぎらりと睨みつけるような眼差しで見つめる目のよう。

その黒い姿を否応無しに照らされ、光の下に晒される。

その中を一人の男が、雨に打たれながら歩いていった。

雨を避けるためか被っているフードからはみ出す、闇に映える灰色に近い銀の髪。朱色の瞳。膝丈まである茶色のコートを羽織り、黒い靴が暗い夜道を踏みしめながら歩く。そして、背中には大きく鋭利な両刃の武器を背負っていた。

この雨の中傘も差さずに、何かを探しているように周りを見渡しながら、一歩ずつ歩いていった。

闇夜の肌寒さに加えて、さっきから降り注ぐ雨のおかげで随分と体温を奪われていく自覚があった。しかし、そんな素振りは微塵も見せない。

フードのお陰で、表情すら窺い知る事は出来なかった。

懐かしい寒さだ。

そういえば、向こうもこの位寒かったかもしれない。

男はそこまで考え、小さく鼻を鳴らし、笑った。

らしくも無く、寒さに触れて郷愁の思いにでも駆られたのだろうか。僅かでもそういう考えに至った自分を、自嘲気味に笑った。

それから入り組んだ石床の道を数分程歩いた後、ふと、男は足を止めた。

雨の所為で前方が見にくいだが、進路上の目視できる位置に、確かにそれはいた。

大通りからはずれ、街灯も何も立っていない道のと真ん中。そこに黒いコートを羽織った初老程の男が、天を仰ぐように上を見つめていた。

その目線の先には、月さえも隠れてしまった曇天の夜空があった。一体、何を見ているのか。フードの男には見当もつかなかった。

フードの男は、声をかけずに無言で初老の男に向かってゆっくりと歩み寄って行った。

雨の中、まるで神にでも祈るかのように天を見つめ続ける初老の男。

この暗さの中でも、互いの顔が見える程の近さまで近づくと、フードの男はぴたりと足を止めた。石床に溜まった水が、弾みでぴしやんと跳ね上がる。

「無粋だと思わんかね？」

それを待っていたように、天を見つめ続ける初老の男はポツリと呟いた。

その低く良く通る声は、雫が地面に絶えずぶつかってやかましい雨音を立てているというのに、銀髪の男の鼓膜を揺らした。

しかしフードの男は、それに答えて口を開く事は無かった。

しばしの沈黙が、雨の夜道に落ちる。

じつと見つめていれば吸い込まれそうな程真っ黒い空から落ちてくる雨が、地面を打つ音だけが、微動だにせず沈黙する男二人の耳に届いていた。

「……闇に紛れ、生きる者に雨の洗礼とは。神というもなかなか無粋なものだな」

いるとすれば、だがね。

そう、先に口を開いたのは初老の男だった。

ずっと天に向けていた視線をようやく地上に戻し、初めてその目にフードの男を映す。

「生憎だがな」

フードの男は、その視線に鋭利な刃物の如き睨みで返答した。

「私は、神よりも力ある存在を知っている」

それを聞き、初老の男は微笑交じりに溜息をついた。いや、微笑というよりは呆れた、という意志表示だろうか。

「教えてもらおうか」

フードの男はそう言ってから一歩、踏み出した。同時に、背中に背負っている両刃の武器を手に取り、初老の男に対峙する。

それに相對する初老の男は、その男の様子を動揺の一欠片も見せずに監察していた。微笑すら浮かべている様は、言外に余裕を物語っていた。

無駄なことはやめておけ、と。その様がまるでそう語っているように、フードの男には映っていた。

フードの男は、なお苛立つ。

「『セカンド・ハート』は、どこだ？」

そう言うのを予想していたかのように、初老の男は笑った。心底おかしそうな口元とは対照的に、眼には鋭い光が宿っている。含むような笑い声が雨音と混ざり、消えていく。

「生憎だな。私はそこまで浅薄ではないつもりだ」

「……ならば」

初めからわかりきっていたように、やはりな、と言いたげに溜息をついた銀の髪の男は、右手の『それ』を体の前面に出すように構える。

すると次の瞬間には、透き通った水色の刃を持つ『それ』は、乾いた耳障りな音を立てながら、青い稲妻に包まれていった。

暗い夜道に青い閃光が奔り、所有者の銀の髪を際立たせる。

「力づくで、吐いてもらおうか」

初老の男は、既に笑っていなかった。

「やってみたまえ」

## 『ステップ・オン・ザ・ガス』第一話

1 .

目の前の車窓を通して、高速で流れていく風景を眺めながら『ハンス・ターキンス』は小さな溜息を落とした。

少しだけ開けてある窓からの風に跳ね気味の茶髪が揺れ、薄く開かれた黒い瞳は何処と無く遠いところを見つめていた。

青を基調とするシャツは窓の外に広がる青空に映え、黒く着古したズボンを履いた両足を組みながら気だるげに座っている。誰も座っていない隣の席には、一本の剣が立て掛けてあった。

ハンスは眠気の所為か、はたまた別の要因なのかいつに無くぼんやりと窓を見つめていた。

目的の到着駅までは恐らく、もう一時間程度かかるだろう。そう思うと、憂鬱な気分になり自然と溜息が出てしまう。

だが、決して退屈だからという子どもも染みた理由だけではなかった。

ハンスは列車という、人類の生み出した文明の利器とでもいえる産物が嫌いだった。

右斜め前に母親に連れられて座っている三歳前後の子どもを見て、あのように無邪気に騒げたら楽だろうな、とさえ思う。

列車には、良い思い出が無い。

と言つても、列車に良い思い出がある人など稀であろう。ハンスの脳には、『悪い』方の思い出が強烈に刻み込まれているのだった。いくら年月が経とうとも、頭に頑固にこびり付いて、ハンスの中に居座り続けている。

今もこうして、ただ二人掛けの座席に座っているだけだ。しかし、たったそれだけである時にタイムスリップしたかのように鮮明にある光景が浮かんで来るのが分かる。

少し白みがかった映像。そういえば、あの時も窓側の席に座っていたような覚えがある。そして、隣には

姿も、声も、言葉も。

何もかも、鮮明に蘇ってくる。

いつもはたいして機能しなくせに、こんなところの記憶力がよかったのか、とハンスは自嘲的に笑った。

ハンスにとつて最も尊敬できる、少年時代の彼にとって『世界の全て』といつても過言ではない程、大きな存在。

それについての最も新しく、そして最も惨たらしい記憶だった。月日と言うのは早いもので、アレから八年の年月が経っていた。

人間は、そう完璧に出来ていない。

数多くの知識を覚えることも出来れば、昔に起きた数多くの事物を忘れることが出来るのも人間だ。それは、人間に許された、ある種の能力なのかもしれない。

今のハンスには、新たな居場所があった。

新たな仲間も得て、やりたいと思うこともようやく見つけることができた（朝イチで列車一時間の辺境まで行かされる始末だが）。

今の彼には、それだけで十分のハズだった。

しかし列車に乗ると、一気にその自信が崩れ去るのが分かった。

まだ自分は、過去に囚われているのだ、と。所詮は、ただより所を探しているに過ぎないのだ、と。

そのように過去が語りかけてくるような気がしてくるのだ。

ハンスはその映像を振り払うかのように深く溜息をついて、後ろ頭をガシガシと掻いた。

勢いよく掻きすぎて、血が出たような気がする。だが、今のハンスはそんなことは気にもせず、車窓から目を離し天井を仰ぐ。

「あー……やっぱ、列車はだめだわ……」

小さく漏らされた呟きは、他の乗客の耳には届かずに汽笛にかき



消されて行った。

やたらガタイの良い男が、車両と車両を繋ぐドアを蹴破って入ってきたのは、それから一分もしない後だった。

耳障りな轟音が響き、なにやら大きめな剣を携えた男が数人入ってくる。次の瞬間には、ハンスの目には五人の男が映っていた。

髪型とか、髪の色とか、よく見ると細かな違いはあるのだが、同じような顔だな、とはハンスが抱いた第一の感想だった。おまけに体つきも似ていると来てる。

もしかや兄弟なのか、とハンスは場違いな事を考えながら、特に興味も無くぼんやりと見ていた。

「てめえら！ 全員大人しくしてろよ！ たった今から、この列車は俺たちが占拠した！」

リーダー格の男が図太い声でそう宣言すると、乗客達はたちまち騒然となった。

驚いて目を見開いたまま固まっていたり、悲鳴を上げながら手で口を覆ったり、と車両に喧騒が広がる。

その様子を見て、仲間の一人が壁を激しく蹴りつけて黙らせる。鈍い音が響き渡ると、悲鳴のような声を最期に乗客はぴたりと静かになった。

「死にたくなければ黙ってる！」

その男の声を聞きながら、ハンスは段々と状況を理解してきた。

ああ、トレインジャックってやつ？

周りの乗客よりもワントempo遅くその結論に達したハンスは、深く溜息をついた。

どうしてこう、気分が陰鬱な時に限って厄介ごとが転がり込んでくるんだらうか。

人が傷心中だったのに。

当然ながら、向こうはそんなことはお構い無しだらうが。

そういえば、こういう仕事をするようになってからは厄介ごとに巻き込まれる回数が多くなってきた気がする。仕方がないと言えば

仕方が無い。

そう心の中でぼやきつつ、ぼりぼりと頭を掻きながらキョロキョロと周りを見渡してみると、ハンスの席からさほど離れていない所で震える人影が一つ。

制服から見て、この列車の乗員の女性だろう。完全に腰が抜けてしまっているのか、地面にへたり込んだまま両手で口元を押さええている。

見た目から見て、まだ若い。配属されたてなのかもしれない。それでこんな現場に居合わせるとは、ついてない。

近くには運んでいたらしいカップに入れられたオレンジジュースらしき液体が、床に豪快にこぼれていた。

もったいない、とハンスは場違いに思った。

ハンスは立て掛けてあつた剣を取り、座ったまま隣の席に移動した。遠くから男達が、動くな、だとか騒いでいるが、特に気にせずハンスは無視を決め込んだ。

「もしもし」

そつと身を屈めて、女性に小さく声をかける。

女性は大げさな程肩を跳ね上がらせて驚き、大きく見開かれた目でハンスを見上げた。

危うく声を上げそうになるが、口元をしっかりと手で押さえたらしい。声は鎮圧されていた。

「俺、こういう者なんだけど」

しかしハンスはそんな様子はお構い無しとばかりに上着のポケットをまさぐり、一枚の長方形の紙切れを取り出した。それをやや投げやりに女性に差し出す。

女性は、訝しげな顔をしながらそこに記された文字をゆっくりと目で追うと、弾かれたようにハンスに顔を向けた。その表情は現在の状況に対する恐怖よりも、驚きの方が勝っていた。

そこに記された文字。

便利屋ギルド、『テイルヴィング』。

「ま、そういうわけだからさ」

ハンスは、女性の方に顔を向けることも無く気だるげに言った。少しも慌てることなく、焦りは欠片ほども見えない。

剣はすでに、右手に握られていた。

「助け、いる？」

答えなど最初から聞く気も無い。拒否したとしても、無駄。その言外に語っているような雰囲気のを醸し出しながら、ハンスは女性の前を横切った。

「お、お願いします……」

「りょーかいっ」

消え入りそうな声に後ろ手に小さく手を振って答えると、ハンスは男達の前にゆっくりと躍り出た。

「報酬はオレンジジュースで頼むよ」

相変わらず、頭をぼりぼり掻きながら。

2 .

「ああ？ 何だこのガキ？」

面と向かうなりいきなりガキ呼ばわりされ、ハンスの眉根が若干寄った。失敬な、俺は十八だぞ、と心の中で叫んでおいた。口には出さないが。

しかし、そんな様子を見ようとせせず屈強な男達はじりじりとハンスに近寄って来る。

「大人しくしてた方が身のためだぜ、坊や？」

からかう声を無視するように、ハンスは剣を肩に担いで仁王立ちのような姿勢で立っていた。坊やってなんだ、とまた少し眉根が寄る。

そのままの姿勢で、ハンスは男達に言った。

「あんたらに恨みとかは無いかどさ、依頼だから」

「ああ？」

リーダー格の男が呆気に取られたような顔で素っ頓狂な声を上げる。他の仲間も、ついでに言えば後ろの乗客達も同じような顔をしているだろう。

それもそのはず。

いきなり現れた少年が、まるで屈強なトレインジャック犯相手に喧嘩を売っているような振る舞いをしているからだ。

乗客的には、頼むからあまり刺激しないでくれ、という悲痛な叫びを懇願の表情で声を殺して叫んでいることだろう。

しかし、ハンスはそんな物はどこ吹く風という様子で立っていた。後ろの乗客を振り返ることも無く、目の前の男達に怯む様子など微塵も感じられない。

「正直、一個依頼こなしてきたばっかで、あんたらの相手なんてやりたくねえとこだけど……」

そのハンスの態度を目にする度に、男達の目つきは鋭くなっている。

普通の人間なら、恐怖を骨の髄まで刻むであろう形相だ。その殺気立った雰囲気、後ろの乗客達が息を飲むのが分かった。

だが、ハンスは恐怖など一片も感じていなかった。

そう、簡単な事だ。

こつという類の殺気は、経験上、自分自身に『酔った』奴が出す殺気だ。

負けたことが無く、自分より上に幾千万の人間がいることを知らない。一言で言ってしまうえば、世間知らずなのだ。

正直言って、ハンスはそんな者は今までに何十何百と見てきていた。

時には都市の裏で幅を利かせるマフィア相手に立ち回ったりしたことだってある。それに比べれば、恐怖する価値さえ見出せなかった。

「悪いけど、倒させてもらつよ」

その一言が車内に響いた瞬間、この場を取り巻く緊張感はピークに達した。

ハンスの態度にさすがにいらついたのか、こめかみに青筋を浮かび上がらせた男達は次々と自分の武器を手にする。

「おいガキ……てめえ、自分が何言ってるのか分かってんのか？」

「分かってなきや言わねえよ」

ハンスはそこまで言うと、肩に担いだ剣をゆっくりと前に構えた。眩い白銀の刃が、照明を反射してまるで光そのもののように輝く。男達も、無骨な太い剣身を持つ剣をそれぞれ構え、ハンスに照準を定める。

「ああ、そうかよ……！　じゃあ、後悔させてやるぜ！」

リーダー格の男が叫び、躍りかかるように剣を振るつた。真つ直ぐな兜割。ハンスはひょいと後ろに小さく跳躍し、男の剣は床に激突して突き刺さる。乗客たちが悲鳴をあげているが、ハンスの耳には全く入らない。

間髪入れずにハンスは前に奔る。目の前の男は、頭を垂れた完全な丸腰。

その男の顔面へ目掛け、ハンスは渾身の跳び蹴りを放つ。

「ぐえ！？」

ぐぐもつた情けない声をあげながら、男はたまらず後ろに吹っ飛んだ。閉じられたドアに後頭部をしたたかに打ち、動かなくなる。

その間、僅か数秒。

まず一人。

ハンスは心の中で数える。

周りの男たちは身動きも取れず、呆然と突っ立っていた。

そして我に帰り、一人が奇声を発しながら剣を振り上げる。

しかし、遅い。

ハンスは着地と同時に、身体を軸に回転。右手には白銀の刃が光っている。

そして一人振り上げたままの剣を下せずに、男がゆっくりと倒れた。

二人。

ひゅん、とハンスの耳に風を切る音が届く。同時にハンスは横に転がる。背後から背中を狙う剣は空を斬った。

小さい舌打ちが聞こえ、男は床を狙う突きの構えを見せる。

ハンスは瞬時に身を翻して立ち上がると同時に、膝のばねを利かせて思い切り床を蹴る。

その勢いのまま、肩口を切り裂く。

三人っ！

眼前の光景を目の当たりにし、眉根を凶悪に寄せ、二人同時にハンスに向かう。

車両同士を繋ぐドアの前という狭い空間だ。同時に攻めかかるのは、逆効果。

ハンスは瞬時にそう判断し、再び奔る。

男の一人が一瞬怯む。その瞬間を逃さず、ハンスは勢いよく踏み込んで一人の剣を思い切り打った。

激しい金属音と共に剣が弾き飛ばされ、通路に刺さる。

男がそれに驚愕の表情を浮かべるが、すでに遅い。

ひゅつと風を斬るような音。

それを最後に、男は意識を失った。

倒れた男を跨いで、ハンスは最後の一人に向かい奔る。最後の一人は恐怖か、驚愕のどちらともつかない汗まみれの表情で向かってくるハンスを見ている。

反応が追い付かない。見ているしか、できなかった。

銀の刃が躍る。

それを防ごうと無骨な剣が動くが、動揺が剣に伝わっているのか力がこもっていない。あっけなく横に力を逸らされる。

ハンスは踏み込み、そして、腹部を横薙ぎに一閃。

「が……！」

声を上げ、まるで木の葉が風に舞うように、ゆっくりと地面に倒れる。

それを見ている観客たちは、いつの間にか黙っていた。その大立ち回りに、呆けたように大口を開けて見入っている。

まるで大スペクタクルの演劇を見ているように。

「後悔すんのは……」

疲れたように右肩を回し、きん、と鞘に右手の剣を納める。

「あんたらの方だったな」

相変わらず、ぼりぼりと頭を掻きながらハンスは自分の席へと身を埋めた。

## 『ステップ・オン・ザ・ガス』第二話

相変わらず騒がしい街だなあ、とハンスは欠伸をかみ殺しながら思った。

最寄の駅から100メートル程しか離れていないというのに、ただ真っ直ぐ歩いているだけで誰かしらに正面衝突してしまいそうな程、人手ごった返している。

一体何処から湧いて来るんだ、とあまり人混みが好きではないハンスは思わずにはいられなかった。

しかも苦手な列車に長時間乗った挙句、帰りは寝て過ごそうと思っていたのに、トレインジャックの所為で碌に眠れなかった。まさに踏んだり蹴ったり。

今日についてはないな、とハンスは小さく溜息をついた。

ハンスは今、『ミークネス』という町をのろのろと歩いていた。

人口はゆうに100万を超える大都市であり、産業その他の規模も周りの都市と比べて最大。

特に、鉱物加工業の隆盛が凄まじいようだ。ここ数十年で一気に発展の兆しを見せ始め、気がつけば周りから頭一個抜け出ている。

文字通り、この街は『ミステイル大陸』の首都なのだ。

こう何気なく周りを見渡しただけでも、忙しく道を歩くビジネスマン風の男やきつちりとした貴族風の女性、はたまた左手の買い物袋を重そうに持ちながら歩いていくおばさんなど、様々な人の活気で賑わっているのが手に取るように分かる。

栄える街には人が集まっていくものだ。

さらに頭上に目を向けてみれば、大金持ちに上り詰めた者達作り上げた、財力の象徴たる背の高いビルが立ち並んでいるのが目に入る。

最近立てたばかりだろうか、白い塗装が太陽の光を反射して眩し



かった。

自身のギルド『ティルヴィング』に帰還するために、ハンスは商店街を突っ切るように歩いていた。

『ミークネス』の中心からは大分外れるものの、そこに住む人間の活気は変わらず、ハンスの周りを行ったりきたりしている。

駅から帰るには一応最短ルートを行っていているはずなのだが、この商店街を突っ切らなければいけない所為で、回り道した方が早いんじゃないだろうか、という気さえ起きてくる。

しかし実測してみれば、多分こっちの方が早いだろう。

石でしっかりと舗装され、綺麗に整っている道を眠いだとか、疲れたな、だとかさっさと帰りてえなあとか脳内でうだうだと考えながら歩く。

これも遠出した時の、ある種の日課になってしまっている。

そのまま数分歩くと、やっと人の壁によって遮られていた視界が開け、商店街の出口にたどり着いた。

やっと出たか、とハンスは安堵の溜息をつき、再び帰路に向けて歩を進めた。

商店街を出てしまえば、目的地は目と鼻の先だと言ってもいい。円状になっている道を少し道なりに進んで、路地裏の方に折れるだけ。時間にして数分だ。商店街に向かうのであるう通行人とは逆方向に歩いていると、ハンスの左手に細い路地裏への道が見えてくる。

太陽の光が当たらず暗い路地裏を抜けていくと、そこにやや大きく古びた屋敷が佇んでいる。

木造の二階建てで、昔は宿泊施設として使われていたという過去を持つこの屋敷はなかなかの広さを持っている。当初は木目の美しさが評判の佇まいだったそうだが、ハンスたちが手入れらしい手入れをしていないため、今ではみすばらしくなってしまった。

ドアの近くに立ててある『ティルヴィング』と記された看板が無ければ幽霊屋敷のように、不気味に見える。

ハンスはこの不気味でやや小汚い屋敷を目の前にする度に、いつも安堵の気持ちが増かび上がってくる。

ここは最早、彼にとって我が家に等しい場所なのだ。

仕事帰りに我が家を目の前にした瞬間というのは、恐らく人生ベスト10に入る安堵の瞬間なんではなからうか。肉体や頭脳を酷使した後に、視界に飛び込んでくる懐かしき我がオアシス。恐らく世の働く親父さんたちなら、共感してくれると思う。

ハンスはそんなくたらないことを考えながら、疲れからか安堵からか、どちらともつかない溜息をつきながらドアノブに手をかけた。「うーっす、ただいま帰ったぞーっ」と

中に足を踏み入れると、ただっ広い空間がハンスの目の前に広がってきた。

まず受付としての名残である小さめのカウンターがドアのすぐ左に位置している。現在ではコーヒークップやら紅茶のビンやら新聞雑誌などがその上に散乱し、完全なる物置と化している。

広さに対して、置いてある物の少なさがやはり目立つ。

家具らしい家具と言えば、『組合長<sup>マスター</sup>』とその秘書用の事務デスクと、来客用のソファとテーブルぐらいだ。しかもソファとテーブルの置いてある場所はどうか考えても適当に置いたとしか考えられない、中途半端な場所だ。

なんとも情けないがスカスカのこの部屋を見れば、家具を揃える余裕など無い、という『テイルヴィング』の経済状態の現状が垣間見える。

「おう、ご苦労さん」

すると、これまた見慣れた金髪の男が見慣れた顔がデスク（組合長専用のだが、勝手に座っている）に座りながら軽く声だけかけてきた。視線はハンスを捉えておらず、傍らに湯気の立つコーヒークップを置いて、木造のデスクに置いてあるものに一心に向けられている。

そこには鈍い鉛色をした様々な形の部品らしき物が、散乱と言っ

ていい状態で置かれていた。

金髪の男はそれを磨いたり、目の高さまであげて光を当ててみたり、埃を飛ばそうと息を吹きかけてみたりと小さな部品相手に格闘しているようだった。

「また銃の整備かよ、ラトフ。飽きねえのか？」

「飽きるかよ。一応俺の相棒だからな」

ハンスは腰の剣を降ろして、適当に置いたとしか思えない中途半端な位置に置かれているソファに腰掛けた。デスクに座っている金髪  
「ラトフ・ハーリー」はそんなハンスにやはり見向きもせず、目の前の自分の相棒と格闘している。

「『組合長』<sup>マスター</sup>なら出かけてる。また会合だよ」

「ふーん」

やっぱり『組合長』<sup>マスター</sup>ってのは忙しいんだな、と漠然と思いながらハンスはソファに埋まるように身を預けた。

「ラトフ・ハーリー」は、彼の先輩だった。

目にかからない程度の長さの金髪、薄い碧色の目は絶えず鉛色を映している。彼の生活感を彷彿とさせるくたびれた黒いシャツ、青いジーンズを履いた足を組んでデスクに座っていた。

ハンスが『ティルヴィング』に入ったのは、ほんの二ヶ月ほど前だが、ラトフは数年単位だ。年数から見てもハンスの方が大分後輩である。

しかし、ラトフは初対面にハンスと面倒くさい付き合いは御免だとまず初めに言ってきたのだ。先輩後輩なんて、堅苦しいのは抜きにしろ、と。

そんな初対面だったおかげでハンスはラトフを遠慮ゼロで呼び捨てにするし、常時タメ口が主流になった。ラトフもハンスを先輩として扱わずに、まるで友人。それも悪友のように気兼ねなく接する。

ハンスはこの男のそういう気さくな所が気に入っていた。

「で、どーよ？」

ハンスがソファに埋もれている間に結構なスピードで銃の完成形を組み上げたラトフは、もう一挺を取り出しながら言った。

その若干期待に上ずったような声から、ああとハンスは彼の言わんとした事を理解した。

どっこらせ、と言わんばかりにめんどくさそうな動作でソファから立ち上がる。気だるげに上着の懐ポケットに手を突っ込みながら、ラトフに近づいた。当然、仕事から帰ってきたのだから報酬のことを聞いているのだろう。

そしておもむろに幾分膨張した茶色い封筒らしき物を二つ、デスクの上に放り出すように置いた。

ラトフは初めて銃から目を離しその封筒を見た。すると驚いたように目を丸くして、一つを手に取る。しばらく触ったり、中身を除き見たりとした後、にっと口元を上げる。

「おいおい、なかなかじゃねーか。気前いい客だったのか？」

「いや、一つは報酬でもう一つは謝礼だ」

「……謝礼？」

「おう」

眉をひそめて怪訝そうな表情で聞き返してきたラトフに、駅長やらなどハンスは答えた。またなんで駅のお偉いさんからなんだ、とさらにラトフはさらに怪訝そうな顔になっていく。

ハンスはめんどくさそうに、今朝のトレインジャックの事をラトフに説明した。

ハンスはあの車両に乗り込んできた無粋な男達をのした後、到着駅で駅長に呼ばれたのだ。何でも感謝の意を表したい、とか。

随分熱心というか、強引でだった。

ハンスはベッドが恋しく、一刻も早く帰りたいためだけに別にいい、と断った。しかし、彼はなかなか折れなかったのだ。

そしてその熱意に押し負けるようにして渡されてしまったのが、今ラトフの目の前に置かれている封筒の中身。

不利益なわけでは無いので、別にいいのだが。重さ、見た目から判断して中身はなかなからしい。

ついでに、帰りがけにオレンジジュースも頂いていた。

「あー、なるほど。そりゃ災難だったな」

合点行つた、と言葉とは裏腹に特に驚くでもなくすんなりとラトフは呟いた。

そして再び二挺目の整備を再開し始める。

がちゃがちゃと手馴れた様子で細かく分解していく。ハンスも全く大したことでもない、というかのごとく大あくびを一つし、ラトフのデスクから離れていった。

この時ハンスは疲れていた。遠路はるばる仕事に出向きその帰りに厄介ごとに巻き込まれた物だから、この上なく疲れていた。

いつもそれほど多くの仕事が舞い込み、てんてこ舞いという訳ではない。それよりもむしろ、少ないほうだ。

てんてこ舞いになってくれ、というのが現状である。

故に今までもそれほど疲労感を感じる機会は無かったのだが、今日は何故だかぐったりというのはこういうことか、と感心するほどに疲弊していた。

色々と思い出したくない物も思い出してしまったし、もしかすると精神的な物が大きいのもかもしれない。

ハンスはぐぐつと大きな伸びをして、カウンター側にある奥に続く階段へと歩きだした。

この『テイルヴィング』本部二階には、メンバーの私室が設けられている。

これも元宿泊施設の恩恵で、ありがたいことに個室のベッドは全部屋に残されていた。あるならば使わせてもらおう、ということである。現在はハンスたちの寢床となっている。

ハンスはとにかく疲れを癒すべく、一刻も早く自室のベッドにダイブを決めたかった。

だるい手足を無理やり動かして、二階に繋がる階段を目指しての

るのろと歩き出す。

「おいハンス、どこ行くんだ？」

すると、背中の方からラトフに声をかけられた。

ゆっくりと振り向いてみると、わりと整った顔の口元に若干嫌な感じの微笑が浮かんでいるのが見えた。

反射的に、嫌な予感がハンスの背中を駆け巡る。

「寝るんだよ。疲れたから」

「ほー、そうか」

ハンスが若干不機嫌な声で答えると、ラトフはさらに面白そうな顔で笑い始めた。

その顔はまるで悪戯を仕掛ける子どものように随分と楽しそうだが、ハンスにとっては不愉快以外の何者でもなかった。

仕事帰りに我が家で眠る時と言うのは、人生でベスト5に入る安息の時間なんではなかるうか。

重い四肢を引きずりながら寝室に辿り着き、柔らかな布団に身を預ける瞬間こそ至福。

そしてそのまま嫌な上司の小言や面倒な客とのやり取りなどは全て忘れ去り、夢の世界へと旅立つ。世の働く親父なら共感してくれると思う。

だが、ハンスの安息の時間は。

「そりゃ、残念だなあ。実は、もう一つ仕事が入ってるんだよ」  
まだまだ、訪れそうに無かった。

### 『ステップ・オン・ザ・ガス』第三話

1 .

『ミークネス』中心街はもうじき夕方となる時刻のおかげか、昼間よりも人が減っていた。昼間はあんなに狭く見える道幅も、この時間はやや広く見えるのが不思議だ。

傾きつつある陽が、街の顔を少しずつ変えていくのが目に見えるようだ。

日中の活気と熱気に溢れた、元気一杯の子どものような顔から、少しずつ落ち着いたオレンジ色へと。

そんな中ハンスとラトフは、『テイルヴィング』本部から約30分程かけて中心街に到着していた。

この大陸の大きな都市内には、『市内列車』という物が配備されている所がある。

その名の通り、都市の中を移動する為の小型の列車のことだ。

近年、馬車に変わる移動手段として考案されたのがそれだ。

馬車専用の道がある訳でもなく、通常の人を通る道を馬車が走らざるを得ない状況に人々が不満を訴え、そして何より馬の暴走による事故が多発し減少の兆しも見えないため、それに応える形で開発されたらしい。

人の創造性というのは全く逞しい物で、身近なところで本当に必要な物は驚く程の手早さで作り上げてしまう物だ。

数年という時間をかけ都市内に専用の線路を設け通常の列車よりかなりの低速で走らせた所、その手軽さと利便さにより、次世代の足となったわけだ。

今回も、歩けばゆうに1時間はかかると思われる道のりを、この『市内列車』のおかげで大分短縮できた。

この恩恵は大きく、今という時代に感謝しなければならぬかも

しない。

しかし、ハンスは今はそんな気にはなれなかった。

今まさにベッドに飛び込みんとしていたところに、もうひと仕事だと聞かされて半ば無理やり連れ出された挙句また苦手な列車に乗って移動しなければならぬ始末。

感謝なんてしてる暇があったら、自室のベッドで惰眠を貪りたい。

ハンスは切にそう願っていた。

「眠そうだな。さつきから」

「当ったり前だったの……」

ハンスがしょぼしょぼする目を擦っていると、ラトフが少し眉根を寄せてこつちまで眠くなる、とでも言いたげな顔で声をかけて来た。

外出用の服装なのか、本部で着ていたシャツの上に焦げ茶色のコートを羽織っている。

右手に一枚の新聞記事を持ち、ハンスの顔と記事を交互に見るような形になっていた。

「いや悪かったって。あちらさんが出来るだけ人手をつれて来いっつってたからな」

「……で、俺もってわけか」

無愛想に返したハンスの声に、ラトフは軽く笑って返して来る。

この顔では悪かったなどは欠片も思っていないだろう。ハンスは内心溜息をついた。

だが、彼『ハンス・ターキンス』という男は切り替えの速い男だとよく他人に言われる。一応、自分でも自覚はしている。

仕事で色々と胸くその悪い思いを味わっても、一時間かそこから昼寝すればけろりと元通りになるという単純さを備えていた。

自分は便利屋ギルド『テイルヴィング』の一員だ。

仕事が入ったのなら疲れただけの眠いだのと色々四の五の言わずに出向かなければならないのは当然で、それこそが便利屋として正しい行動なのだろう。



やるしかないか。

ハンスは眠気を覚ますように自分の両頬を両手でぺちぺちと叩き、ふーっと長く息を吐いた。

その様を横目で見届けてから、ラトフは右手持っていた新聞をハンスの目の前に差し出す。

「どうやら一面記事を飾る記事のようだ。見出しが大きな文字で、新聞特有の材質の紙上部に記してあって、その下にはなにやら古ぼけた　丁度、『テイルヴィング』本部くらいの　大きな屋敷を写した写真が載せられている。」

『これで四件目！ 窃盗団現る！？』

目立つ大きな見出しは、そう謳っていた。

「窃盗団？」

それを見せられただけではよく事情が飲み込めず、ハンスは首を傾げた。

ラトフはああ、と頷く。ついでに、新聞ぐらい読めと苦言を呈した。

「事前に予告状を送りつけて、わざわざ警備を厳重にさせた上でそれを破って獲物を盗むのを楽しんでる変態どもだ。俺にはわからねえ趣向だな」

毒づくというよりは、呆れが前面に出ている口調で言う。

「今回の依頼は、そいつらからあるブツを守ってほしいっていう依頼だ。目的地は、あれ」

ラトフはそう言い終えると、ある一点を指差した。

ハンスがそれにつられる様にその方向を見ると、一際大きく壁面は白い塗装で屋根は赤系統の色になっている、いかにも格式高そうな建造物が目に入った。

外からテイルヴィング見ただけでもかなりの広さがあることが伺える。見慣れた屋敷と比べても、二倍以上はある。

ハンス達が歩いているところ、ギリギリで目視できる程の距離に位置するその建造物の周りには既に夕刻だと言うのに、中に入場せんとする客で賑わっていた。

建てられた看板にポスターのような紙が張ってあり、それをひとしきり眺めた紳士風な男は、優雅な足取りで金の装飾が施された門をくぐって中へ入っていく。

あれは確か。

「美術館、だな？」

確か、名前は『ガーベラ美術館』と言った。ハンスがさういうと、ラトフはその通りと言うが如くニヤリと笑って指を下ろした。

「やつこさんがいる所さ。俺らはあそこの中の何かしらを守ることになる」

何かしら、とはまた曖昧だ。

ハンスが言うくとラトフも苦笑いを浮かべる。

ラトフ自身もそう思っているのだらう。

「予告状が来たのか？」

「らしいぜ」

ラトフが言うには、依頼を受けたのはハンスが出掛けていた間のことだったらしい。

その時はまだギルド内にいた秘書が応対すると、『ガーベラ』からの使いであると名乗り、仕事の依頼をしたいと言い出してきたのだ。

そこで受けた依頼が『美術品の防衛』だ。

恐らく、最近の新聞で騒がれている窃盗団だと確信したのだらう。彼は予告状を見せ、明日公開初日を迎える品物を守ってくれと言ったらしい。

「何を守るのかって話は到着してからって言われてるからな。何度聞いても勿体つけて教えてくれないんだよ」

「へえ」

「何でも、明日が一般公開初日らしくてな。部外者には教えないよ

うにしているんじゃないのか」

「俺らくらいには教えてくれても良いと思うけどなあ」

「同感だ」

そこで、ラトフはそうだったと何か閃いたかのように右の拳で左手の平を叩いた。

「言い忘れてた。今回の依頼は、俺らにだけ来た訳じゃないらしい」「ん？」

その『ガーベラ』の使いを名乗る男の話では、既に警察や警備関係の者には話もつけてあり、いくつかのギルド或いは便利屋に声をかけておいてあると言う話だった。

その一つが偶然にも彼ら『ティルヴィング』というわけだ。

「随分必死なんだな」

公だけでなく、完全に民間のギルドも動員するとは。よっぽど件の『窃盗団』を怖がっているようだ。

「そりやそうだろ。なんでも明日の目玉らしいな。一般にもちゃんとした発表はしないで『前代未聞の作品』とか何とか言って、当日のお楽しみにする予定らしいな」

ふーん、とハンスは頷く。

「まあその筋の人間にとってはかなりの値打ちもんなだろう。俺らにはわからねえけどな」

勝手に『俺ら』と一括りにされてしまった。

だが実際その通りだったのでハンスは別に何も言わなかった。

「ま、他の連中に報酬を掠め取られないようにしないと」

ハンスは黙って頷いた。というか、額がざるを得なかった。

最近の『ティルヴィング』は苦しい。

組合長秘書が思いつめた顔で帳簿に向かっている姿を見てしまつて以来、金にはあまり執着が無いハンスもそれを自覚せざるを得なかった。

そろそろ、目的地に到着しそうだ。もう美術館の入り口はすぐそこに見える。

ハンスの眠気は一向に治まる兆しを見せていなかった。

2 .

館内に入ってすぐのところ待ち構えている受付係に依頼の件を伝えると、すぐさま係員の案内で移動することになった。

やはり先客が何組かいたのだろう。

かなり慣れた足取りで案内していく係員についていくと、ある部屋に通された。

広い部屋に黒い革のソファが二つ、ガラス製のテーブルを挟んで置かれている。

壁には海、空、森など様々な風景を描いた絵が飾られている。

「こちらにおかけになってお待ちください」

ハンスとラトフをここまで案内した受付の女性はそう言って二人を座らせると、一度置くに引っ込んだ。

少しすると、湯気の立つ二つのカップを盆に載せて帰ってくる。

コーヒーをいれて来たようだ。香ばしい匂いが二人の鼻を刺激する。

「館長はもうしばらくしたらいらっしゃいますので」

「ああ、どうも」

ラトフの返事に係員の女性は頭を下げ、再び部屋を出て行った。

彼女の役割は案内までのようだ。元の受付の仕事に戻って行ったのだろう。

ドアが閉まる音がしてから、ハンスはきよろきよろと部屋を見渡してみた。

随分しっかりした部屋に通された。

ちゃんとした来賓を迎えるために備えられた部屋だ。

便利屋というのは、総じてあまりいい扱いを受けないのが普通だ。ただの便利屋であるハンスには、世間的にどんな汚い仕事も金で

引き受ける禄でもない奴らだという風潮が浸透しているのかそうでないのか、分からないが。

だが、彼もラトフも周りの評価には微塵も興味が湧いたことは無かった。

そんな物よりも近くの喫茶店で振舞われる、そろそろ食べ飽きた日替わりメニューの方に食指が動く。

それが何時一新されるのかということの方が、よっぽど興味をそそった。

勝手気ままに、自分の好きにやればいい。元々、便利屋なんてそんなもんだ。

ハンスの父が、よく言っていた言葉だった。

それからしばらく待っていると、扉を開ける音の後に数人の足音が聞こえた。

未だ覚めぬ眠気により座りながらうつらうつらしていたハンスは、はっと顔を上げて音の主の方を見た。

黒を基調としたスーツを着た恰幅の良い男を先頭にして、その脇には紳士風の男が二人控えている。

「ようこそいらっしやいました。私が当美術館『ガーベラ』の館長、ハーティーと申します」

恰幅の良い男はそう言っただけでニヤニヤと笑いながら、二人に近づき、片手を差し出してきた。

ラトフはまだ夢と現の間を行き来しているハンスを小さく小突いてから、立ち上がり差し出された手と握手する。

ハンスも慌ててそれに続いた。

「『ラトフ・ハーリー』です。こいつは『ハンス・ターキンス』」

「あ、どうも」

「ええ。お噂はかねがね聞いておりますよ」

ハーティーと名乗った館長は笑顔を浮かべて言った。

ラトフはその何処か狡猾そうに見える笑顔を見ると、今のが恒例の社交辞令である、ということが明確に分かった気がした。

自分たち以外の便利屋にも同じような態度で接したのだろう。  
金持ちという部類に属する者は、割合こつこつという顔をする人間が多い気がする。

要は、予習は十分と言うわけだ。全員に同じ顔するのは疲れるだろうな、とちらりと思つた。

ハーティーは挨拶もそこそこに、早速本題に入ろうとしているようだった。

控えていた男のうち一人から五十センチ四方くらいの大きさの紙を受け取り、ハンスとラトフに見えるようにテーブルの上に広げる。黒いインクで、四角形やら何やらが描かれており、紙の上部には『ガーベラ』と記されている。

どうやら、見取り図らしい。二人は早速覗き込むようにそれを見る。

「当館の間取りを記した物です。一応、間取りは頭に入れていただけいたほうが良いかと」

ハーティーは二人の顔を伺うようにちらりと見ると、図面から顔を上げた。

つられるようにラトフとハンスも顔を上げる。

顔を上げふと視線を彷徨させた瞬間、ハンスは眼が合った。

背中に棒でも入ってるかのように直立不動で立っている男。

きつちりとして清涼感溢れる身なり。

それに何処かふさわしくない眼差し。

刃のように細められ、まるで睨みつけているような目で、射抜くように見つめられる。

品定めでもするかのような、獲物を狙う獣のような、静かで激しい何かを隠した瞳で。

そのわずか数秒が、ハンスにはまるで何十分にも感じられた。

息苦しいような、居心地の悪さが体中を駆け巡る。

すると突然、ふっと目が細められた。

笑っているのだ。

そう認識するのに、これまた数秒の時間を使ってしまった。明らかに、拒絶の意を表しているようにハンスは感じた。見られていた。

何だ……？

監察されていたのだろうか。

あの男に。

ハンスは、隣のラトフを盗み見た。

ハーティと依頼の話で盛り上がっていて、恐らく見られていた事には全く気付いていない。

ハンスが聞く限り話は佳境に入っているようで、報酬の金額まで及んでいるようだった。

しかし、そんな話は耳に入りそうに無かった。

相変わらず、その目は笑ってこちらを見つめていた。

3 .

行き止まりにぶち当たり、少女は思わず眉根を寄せた。

明確な目標地点も決めず、悪く言えば適当にさ迷っていたため当然と言えば当然の結果かも知れない。

短くため息をついて、眉にかかる薄い色あいの金色の前髪を掻き上げた。

少女と言うには少々大人びた顔つき。きりつとした目元に、青い宝石のような瞳。口元にはまだ幼さが残っていたが、整った顔立ちの美人だ。

右耳にだけ付けられた三日月を象ったようなイヤリング。

それが彼女の雰囲気さらに大人びたものにしていて。

女性にしては高い身長で、白い半袖のシャツに膝丈までの黒いパンツを身につけ、女性的なスタイルを覗かせている。そんな格好の

せいか、背中に背負われている槍が際立って異質だった。

見回りついでにと、この無駄に広い美術館の構造を頭に入れようとして丁度五分程歩き回った所だった。

既に夕方と言っているいい時間帯に差し掛かっているのもあって、目に見えて観覧客は減っているようだ。

それでも壁面に飾られている大きな風景画や、ガラスのような透明なケースに入れられた形容し難い形の陶芸品などを見る客の列は途切れないようだ。

芸術や美術、という物にはほとんど趣を感じない彼女 『アニー・ディアフィールド』にとっては、正直に言ってあまり良い時間の使い方には思えなかった。

ふうと自然とため息が出てしまう。

「疲れたなあ」

乗ってきた列車がトレインジャックに遭遇してしまうとはついていなかった。

アニーは再び溜息をついた。

彼女の元に『ガーベラ美術館』の使いを名乗る女性が現れたのは、今朝方の事だった。

仕事柄かそれとも性分が分からないが、決まった場所には留まらずにあちらこちらを飛び回っている自分の前に、彼女はまるで狙いすましたように現れたのだった。

名前は聞き及んでいる。

そう、恐らく社交辞令であろう前置きの後に『ガーベラ美術館』

つまり今現在いる、ここに仕事があるから来てくれないかと打診された。

仕事内容は、窃盗団から明日展示される品を守ること。

ギルドには属していないものの一応女だてらに便利屋をやっている彼女は、魅力的な報酬に、首を縦に振ることにしたのだった。

理由はそれだけではないのだが。

アニーはくるりと向きを変え、来た道を引き返そうと歩き出した。



壁と同じ淡い白で統一された床の上を黙々と歩く。  
熱心な観覧客が、難しそうな顔つきで壁の絵を睨みつけているの  
が見える。

それを横目に、アニーは歩きながら昼間のことを思い出していた。  
トレインジャック犯を踏ん縛って突き出した際に、駅長が言っ  
ていた。

もう一人「茶髪で剣を携えた、何処か気合の抜けた少年」もトレ  
インジャック犯を相手に立ち回りを演じ、見事に全員捕獲したら  
しい。

便利屋ギルド「テイルヴィング」だと、少年は名乗ったそう  
だ。この美術館の館長は、アニーの他にも多くのフリーの便利屋やギ  
ルドに依頼を出しているそう  
だ。

時折すれ違  
う、明らかに美術には無縁の男達  
が恐らくはそれだ  
らう。

「テイルヴィング」。

彼ら以外にも多くの便利屋が来ているらしい。万全を期すため、  
だそう  
だ。

何か、知っているかな。

核心でなくても良い。

砂粒程度でも良かった。

ただの少しだけでも、情報が欲しい。

彼女の右手は、無意識に右耳のイヤリングに伸びていた。

## 『ステップ・オン・ザ・ガス』第四話

1 .

「見られてた？」

ハンスの言葉に、ラトフは素つ頓狂な声で聞き返した。

「誰に？」

「さっきの部屋に居た奴だよ。館長についてきた二人のうちの一人だ」

ハンスは淀み無く言い、それを聞いたラトフは腕を組んで唸った。

「……気のせいじゃないか？」

「いや、ばつちり目が合った」

「目が合っても別に不思議じゃないだろ」

「その目つきがヤバかったんだよ。こう、なんか、な」

ハンスの言葉は要領を得ず、最後には手をせわしなく動かすジェスチャーで終わってしまった。

それにラトフは肩をすくめて応えた。

二人が応接室を出てから、数分が経過していた。

詳しい依頼内容以外の大まかな事は前もって取り決めておいた為、話自体はさほど時間がかからなかった。

新情報といえば、ハーティという人物と、ようやく『護衛対象』

が間接的に紹介されたことぐらいのものだ。

どこか誇らしげに、また重苦しい口調でハーティが言うにはそれは『剣』であるらしかった。

剣が美術品なのかとラトフは首を傾げて聞いたのだが、新進気鋭で最近名を上げ始めたものが製作したらしい。ラトフもハンスもちつとも聞いた事は無かったが。

要は、剣という形をした『オブジェ』である。後ほどお目に掛けましょう、とハーティは興奮気味に言っていた。

彼はその後、身分上忙しいのかそそくさと業務に戻って行ったので、二人は美術館内に見回りを兼ねた散策に繰り出していった。そして、絵画コーナーの巨大な額縁に入った森林の絵の前を通りかかった所で、ハンスが話を切り出したのだった。

監察されているような視線を感じたことを。

「気がつかなかったのか？」

「こっちは話つけるのに忙しかったんだよ」

ラトフのその言葉に偽りは無さそうだった。

今回は例外だが、基本的にハンスは報酬交渉等には立ち会わない。普段の仕事でも秘書やラトフ、組合長に殆ど任せきりなのだ。

彼自身、報酬の額などには興味が無い。

そんなことよりも情眠を貪る方が大切のようで、大抵は交渉中は昼寝の世界に旅立っているのが通例だ。

今日は例外だったが、ほぼラトフ一人で話を進めていた。故に周りの視線などには興味を振る巻いていられなかったのだろう。

ハンスは低く唸った。

「分かったよ、ただ今はそればっか考えててもしょうがないだろ？」

「まあ、そうだけど……」

ハンスは不満げな声を上げ、口を拗ねた子どものようにひん曲げた。それから渋々ながらも納得だ、と言わんばかりの表情で頷いた。それを見てラトフはやれやれ、と苦笑を浮かべる。

ラトフとしても、ハンスの言葉を馬鹿なことだと一蹴する気にはなれない。

「何か、気になるんだよな」

見かけの割に、ハンスの感覚は鋭いのだ。

危機管理能力というか、危機察知能力は並の人間と比べても優れているのは明白だ。

彼と仕事をするようになり、ラトフはそういう場面と何度も遭遇したことがあった。頭でごちゃごちゃと考えているというより、直感のようなのだ。

やはり父親譲りか、とラトフの心に一瞬だけ浮かんだがすぐに消えた。

ラトフは気を取り直して、とまるで教師のように人差し指を天井に向ける。

「よし、ここからは分担と行こうか」

「分担？」

それを聞いたハンスが首を傾げる。

「二手に分かれて中を回ってみよう。一応仕事場だしな」

自由行動と言うことか。それなら動きやすいかもしれない。

ハンスはそう思い、構造くらい頭に入れといた方が良さだろ、と言うラトフに頷いて同意した。

「そうだな……一時間くらいしたら集合しとくか」

「じゃ、あの下でどうよ？」

ハンスはそう言つて、ロビーのほぼ中央にそびえ立つ柱を指差した。

床と天井を貫く鮮やかな白を放つ柱の上部には、木製の味のある丸時計がかかっている。

なるほど、あれなら目立つと呟き、ラトフは頷く。

「ああ了解。じゃあまた後でな」

「おう」

ラトフは軽い口調でそう言つと、ハンスに背を向けて歩き始めた。上背のある背中が小さくなつて行く。

彼の背中ある程度見送つてから、ハンスも移動を開始した。

当然、適当に回ってみるだけなので目的地など無い。

とりあえず足が自然に向く方に任せ、かわりに頭を回転させていた。

さてどうしようか。

ハンスは自問していた。

一時間の自由行動。

正確には自由ではないが、制約が無いという点では似たようなも

のである。その間に何か行動を起こしておくべきだろうか。そう考えているうちも、自然と思考は傾いていく。

あの視線。

眼が合うなんて別に不思議じゃない。おそらく、ただの気のせいだろう。

ラトフはそんな風に言っていたが、どうもハンスには事はそう単純ではないと無い頭で考えていた。

自分の中の何かが、絶えず警告をしているのだ。

何よりあの冷たい輝きを放つ目の異常さは、直接見た者しか分からないんだろう。

ふと、ここでひとつ無茶を試みようか、とハンスは突拍子も無く思いついた。

あの男は見る限り、館長であるハーティの補佐的な役割に位置する者ようだった。

言うなれば秘書という立場に近いのかもしれない。

ともすれば、ハーティに面会に行けばもう一度接触が図れるのではないか。

ハーティに会いに行くきっかけは何でもいい。仕事のこととか何とか適当な理由をつければ恐らくは会ってくれるだろう。

ハンス達を含めた便利屋は、仕事を受け持っている側なのだ。

滅多なことでは無下には扱われないだろう。ハンスの歩みがだんだんと遅くなる。

もしそうなら、ハーティと共にいるはずだ。

あの男の正体がもしも。

実は表向きに出来ないものだととしても、今は秘書の顔をしているのだから。

ハンスはここまで思案して、深く深呼吸をした。逸り過ぎている自分自身を落ち着かせる。

「おい」

「うおっ!?!」

耳元で、声がした。

ハンスは思わず跳び上がった。

そこには、さっき遠ざかって行った筈の男がすぐ横に立っていた。落ち着くどころか心臓が口から飛び出してきそうになってしまった。

いつの間に、とハンスは内心で呟いた。思案していた所為で近づいてくるのに気付けなかったようだ。引き返して来たのだろうか。

「何だ、忘れ物か？」

非難めいた視線と共にハンスがそう言うと、ラトフは曖昧な笑みを返して来た。

そして彼よりも低い位置にあるハンスの右肩に、ぽんと手を置いた。慎重に見合った大きな掌。ラトフはハンスよりも十センチ程背が高かった。

「無茶な事はすんなよ」

目を丸くするハンスにラトフは短く告げて、またも素早く遠ざかって行く。

歩きながらハンスに向かって、背中越しに右手を軽く上げた。じやあな、と口で言う代わりのようだ。

たったそれを言うためだけに来たのだろうか。ハンスは小首を傾けながらその様を見送った。

いやもしかして、とハンスは思い直した。

バレてたか。

ラトフはハンスがどういう行動を取るか、大体の予測がついていたのかもしれない。頭でグズグズ考えるよりも、とりあえず行動を起こしてみる。

それはハンス自身自覚していないものの、一応のポリシーのようなものだった。

組んで二年余り、何となく悔しいがラトフにはすっかり自分の性格を把握されてしまっているらしい。

そう思って、ハンスはバツが悪そうに頭を掻きながら、去ってい

く背中を見送った。

時刻はそろそろ夕刻を過ぎ、日も沈みきった関係で薄暗くなっている。すっかり弱弱しくなっているオレンジ色の光が、白い床を照らしている。

もし奴らが動くとしたら身を隠せる夜あたりだろうか。

こちらから、動くべきか。

ハンスの足は、自然と館長室に向かっていた。

2 .

「申し訳ありませんが、館長は今出ております」

「あー……」

思わずハンスは眉根を寄せ、気の抜けたような声がひとりでに出ている。

館長室はラトフと二人で通された応接室とさほど距離は離れておらず、特に急ぎもせず歩いて一、二分の所に位置していた。

関係者以外の出入りが普段から殆ど無い所為か、華やかなロビーに比べて随分ひっそりとしている印象を受ける。

ハンスはとりあえず向かった館長室の前で、丁度通り掛かった係員に呼び止められてしまっていた。

係員という身としては、重要な区画を剣を携えた若造がちよろちよろしているのは見過ごせなかつたらしい。至極当然なのだが。

一応ハーティから雇われたということ告げた上で、適当に館長に用がと曖昧に答えると返って来た答えがこれである。

「新作の提供者の方との打ち合わせが最終段階に入っているのとこので、外に……」

「いつ頃戻る？」

「さあ……私には分かりかねますが、お時間が掛かるかと……」

ハンスはそうか、と気の無い返事をして残念そうに溜息をついた。当然といえば当然なのかもしれない、とハンスは思う。

その展示物とやらは、ハーティにとつて一世一代の代物であることは間違いないようだ。念には念を入れた準備ということだろう。

そろそろいい時間帯に入ってきたために客の数が減ってきており、今やこの美術館に残っているのは便利屋かまたは警備の者くらいになっっていた。

その中でも、美術館に不釣り合いな物々しい武器を持っている人間が便利屋らしかった。

ハンスの嗅覚が正しければ、ここまで来るまでに少なくとも五、六人の存在を確認できた。この館中となれば十人以上はくだらないのかもしれない。

鉄火面のように表情を崩さずにハンスを見てくる係員を前に、ハンスはふと浮かんだ疑問を訊ねてみた。

「あ、それって秘書もついて行ってる？」

「は？ 秘書？」

怪訝そうな渋い顔で返された。

何で秘書のことを、と思ってるんだろう。まあ当然だろうなどと、別に不快にも感じずにハンスは思った。

「そうそう。二人いただろう？」

「アランとローブナーのことですか？」

アランとローブナー。

ハンスはその聞き慣れない二つの名前を頭に刻み付ける。

さっきその二人と会った時には、名乗っていなかった。

あえて名乗らなかつたのか。

「ローブナーは館長について歩いているのを先程見ましたが……アランは館長がいない間、館内の業務を担当していたはずですよ」

「てことは、まだ一人はこの中に居るんだな？」

「そうだと思いますが」



それを聞いて、ハンスは顎に手を当てて何かを考える仕草をした。

「アランって茶色い髪を後ろに撫でつけてる、背の高い方？」

先程の男のことを思い出して、尋ねる。

確か黒のスーツをきつちりと着こなし、ハンスよりも色の濃い茶髪だった。

そして刃のように鋭く、闇のように深く暗い目。

「ええ。よくご存知で」

ビンゴだ。

何で知っているんだろう。そう言いたそうな目で再び見られながらも、ハンスは心の中で呟いた。

心の奥底が昂ぶって来るのが分かった。

「ちよつと、詳しく聞きたいんだけど」

「はあ……」

それから数分後、係員は洗面のまま丁寧に頭を下げ、失礼しますと言って遠ざかって行った。勤務時間内なのに結構な時間拘束されてしまったからだろうか、その背中にハンスは右手を軽く上げて一応の感謝の意を表した。

見送りながら、ハンスは何時の間にか口の端が上がっているのに気がついた。

予想以上の収穫だった。

ハンスとしては奴ともう一度面と向かっておきたかったのだが。

ふと、近くの壁にかけられた時計を見ると、四十分以上時間が経過している。ラトフと待ち合わせた時間まで、残り十五分程。

そろそろ時間だな、とハンスはここに来るときに比べると格段に軽くなった足取りで、待ち合わせの時計台に向かって歩き出した。

一仕事する前に、沸きあがってくる高揚感と緊張感。

ハンスが『便利屋』を生業とするようになって、初めて気付いた自分の性質。奥底から何か、説明のつかないモノが湧き上がってくるのだ。

さあ、どうなるかな。

ハンスはいつしか、祭りを楽しみに待つ子どものように胸を躍らせていた。

もはや、眠気と気だるさは消えていた。

## 『ステップ・オン・ザ・ガス』第五話

1 .

アニーはある一枚の絵の前で足を止めた。

美術的に興味があるからそれを見たいと思ったわけではない。ただ、あちらの方から目に入ってきたというほうが正しかった。

白い床や壁が太陽の光を反射しなくなる時間帯になって、館内が昼の賑やかな様子とはまた違った様子を見せている。備え付けられた明かりが点等してはいるが、日中に比べると何処と無く暗く館全体をどこかひっそりとした雰囲気包んでいた。

専門家では無いので、そういう雰囲気の問題なのかはアニーには分からない。

しかしある一枚の絵がまるで周りのあらゆる存在から浮き上がっているかのように、彼女の目に飛び込んできたのだ。

優に大の男二人か三人分はあろうかという長さの一辺。

そこに薄衣の四人の男女が描かれている。男と女が二人ずつで、何か得体の知れない球体を囲みそれを見下ろすように立っている。背景には殆ど何も描かれておらず白いままだが、ただ例外的に四人の頭上は僅かに空色が塗られていた。

アニーははっと、その絵に見とれている自分に気がついた。誰に見られているというわけでも無いのに、焦りを覚えて周りを目だけで見渡した。

ただ目に入ったからちよつと見てようと思ったただけだったのだが、思ったよりも入り込んでしまったようだった。

そこに描かれている、不可思議だが何処か美しい世界に。

アニーは溜息をつき、自分の薄い金髪を撫ぜた。少し疲れているんだろう。仕事中は自分の体調に無頓着になりがちだった。そろそろ休憩を入れても罰は当たらないだろう。

そう思って絵の前から立ち去ろうと、踵を返そうとした。すると彼女の隣に一人の男が立っているのが視界に入った。いや、男というより少年といった方が正しいようにアニーには見えた。くしゃくしゃした茶髪の下にある顔にはまだ幼さが見える。

何時の間にいたのか。アニーは僅かに目を見開いた。

そろそろ人も減ってきて、絵をじっくりとみるほとんど客もいなくなっている。その閑散とした中で隣に立たれても気付かないほど、自分は絵に見とれていたのか、とアニーは自分自身にも驚いていた。「なあ」

見られていることに気付いたのか、あちらから声をかけて来た。そしてアニーの返事を待たずに目の前にある大きな絵を指差した。

「これ何の絵だと思う？」

「え？」

「絵なのはわかってるよ」

思わず口から出てしまっただけで、そういうつもりで言ったのではないのだが。そう思ったが、アニーは口にはしなかった。

「……さあ、わからないわ」

アニーは少し考えたものの、結局は思った通りに言う事にした。これは何の絵なのか。言い換えれば何を描いた絵なのか。思えば、普通の人々が絵を見るときにまず最初に浮かぶことかも知れない。

ごくあからさまに描かれた物もあれば、恐ろしく抽象的な物を描いていることもある。

そういう複雑な物が理解できないために、アニーは美術という物に余り親しみを感じられないのだ。

昔からそうなのよね。

アニーは、あまり遠くない昔の記憶を思い出していた。家に飾ってあった名のある画家の作だという絵を見ても、結局何が描いてあるか分からなかった。

この絵もその類だと思った。四人の男女。紫に近いと言えなくも無いが、様々な色が混じっていて形容しがたい色の球体。何も描か

れていない背景。

何かを暗示しているのだろう。それこそこれを描いた作者の心の中にあるものを。しかしいくら考えてもアニーには理解が出来ないだろう、そういう類だ。

「ふーん」

「貴方は何だと思う?」

「さあ」

気の無い返事が少年から返って来る。アニーは若干眉根を寄せた。すると、少年はすっと視線を下げてアニーを見た。初めて少年の目がアニーを捉える。

「お前便利屋か?」

「ええ。そういう貴方もね」

「やっぱりなあ。普通、槍なんて背負ってこんな所には来ないよな」  
「それはお互い様」

アニーは少年の腰辺りに視線を流しながら言った。やはり同業者だから声をかけてきたのか。

少年はぐうつと勢い良く伸びをし、それとほぼ同時に欠伸をした。見ていると移りそうなほど大あくびである。

「俺は『ティルヴィング』の『ハンス・ターキンス』。そっちは?」  
少年の欠伸混じりのこもった声を聞いて、アニーははっとした。

『ティルヴィング』。

彼女と同じ列車に乗り、そして同じトレインジャック犯を倒した男。そう思い当たって、二重の意味で驚いた。

なるほど駅長の言うように、気合が抜けているといわれても頷ける。幼さの残る顔と相まって、覇気のような物は感じられなかった。

だが、どこか懐かしく、親しみやすい感じを受ける少年だった。腰に提げられた無骨な剣が不相応に見える。

「『アニエス・ディアフィールド』。長いから『アニー』でいいわ」  
「なるほどアニーね。じゃ、そろそろ行くよ。いい感じで時間潰せ  
たしな」

「そう、じゃあね」

アニーは薄く微笑んで応えたのを見ると、少年、ハンスはくるりと彼女に背を向けて歩き出した。

遠くなる背中を少しの間見送りながら、アニーは思わずあっと声を出していた。

目的の一つを忘れていたことによくやく今気がついたのだった。慌てて振り返ってみると、既にハンスの姿は小さくなってしまっていた。

しょうがない、とアニーは額に手を当てた。

そうしていると、ふと額縁の下に書かれている絵の題名に目が行った。そういえば、題名も作者名も見えていなかった、とその時初めて思い当たった。

『はじまり』。

そこには、ただそれだけが書いてあった。

2 .

「遅いぞ」

待ち合わせ場所に着いたハンスを出迎えたのは、同僚の不機嫌な声だった。

彼の遙か上の方にある時計に目をやると、指定の時間を十分ほど過ぎてしまっている。しまったな、とハンスは一瞬思った。思いの外絵と同業者に時間を取られてしまったようだ。

「いや、悪い悪い……お、館長さんどうした？」

ハンスはラトフに平謝りしながら、彼の隣にいる人物を見て意外そうに目を丸くした。ラトフの隣には館長、ハーティが恭しく立

っていた。

「はい。実は先ほど礼の品の展示準備が大方完了したのです。それで、お二方にも現物を見ていただこうと思ひまして」

ハンスとラトフは揃って顔を見合わせた。

「お披露目ってわけですか」

「その通りです。お守りいただくに当たって、現物が何なのか分からないのも不便でしょう？」

ラトフは一瞬、すつとハンスに向けて目配せをした。何処か上機嫌に見えるハーティーはそれを気にも留めていない。

それに気がついたハンスは数回小刻みに頷く。大丈夫だろう、というサインのつもりだった。

「まあそりゃそうですね……じゃ、お願いしますよ」

「わかりました。ではこちらへ」

ハーティーの言葉を合図に、二人は彼について歩き始めた。

気がつけば館内には鑑賞目的の客よりも便利屋の数の方が多くなっていた。

公的な手続きから呼ばれたであろう衛兵も玄関付近に陣取っている。

昼に比べて緊張感が高まり、異様な雰囲気になっているのがハンスにも分かった。

関係者のみが入ることのできる通路を進み、館長室を通り過ぎる。

三人とも殆ど何も話さずただ淡々と歩を進めていた。

それから数分すると或る部屋の前に到着した。

他の部屋の扉と比べると、その部屋は鍵が複数個ついていて頑丈なつくりになっている。扉自体もいかにも大事な物が閉まってある、と言つにふさわしい、鉄等で頑強に補強された仰々しい姿だった。

「どござ」

ハーティーが手際よく鍵を開け、二人を中へと促した。

まず入るや否や目に入ってきたのは、四角いガラスのケースに入られ所狭しと並べられた無数の物体だった。美術全般に興味が無

いハンスにとつても、この光景は圧巻だった。

「ここは保管庫になっています。特に彫刻など、大きさの小さいものを保管しています。そしてこれが……」

恰幅の良い館長は興奮したように、早足で一つのケースの前まで移動した。そこには縦長で他のよりも大きいケースに入れられた『それ』が垂直に固定されていた。

それはまさしく『剣』であった。

柄の端から先まで一本の筋が通っているように、すらりと伸びた剣。刃は良く磨かれているのか、キラキラと輝いて見えるようだった。

柄も過度な装飾などはないごくごく一般的な十字型だった。

ハーティールがそれについてなにやら熱心に説明しているのを聞き流しながら、ハンスはラトフと並んでこの剣を遠目に眺めていた。

実を言うと、ハンスの予想していたものとは違っていた。

美術品として『剣』が展示されるのだから何か変わったところがあるのかと思つたが、別段何もないようだ。

よく手入れされていて、今すぐ実戦で使えそうなほどであった。

確かにある種の美しさがあるかもしれない。良く見ると、『ラヴィアンス』と作品名がケースに添えてある。

『ラヴィアンス』ねえ。

ハンスがそう心の中で呟いた瞬間。

彼ははっと息をのんだ。そして、自らの目を疑う。

腰まで届く薄紫の髪。白い装束。

それと同じくらい白い肌。

剣の入ったケースに寄り添う、女が見えた。

そして、ハンスをただ正面から見つめている。

ハンスの思考は数秒間停止した。

まるで脳を含め自分の全てが止まっているかのように、ハンスに



は感じられた。  
背筋を冷たい何かが走る。

女は一步ずつ歩を進めてきた。  
優雅な歩みだ。

着ている白い装束が、体が揺れる度に波のように揺れる。  
ハンスはその髪と同じ紫色の瞳に見つめられたまま、動けなかつた。

手も足も、全く機能しない。

瞬きすらままならない。

段々と二人の距離が詰まる。

ハンスの目の前まで、歩み寄ってくる。

その白い両手が彼の頬を

「ハンス！」

「!？」

ラトフの鋭い声にハンスは弾かれたように反応した。肩をびくりと跳ね上げ、顔をラトフに向ける。

こめかみに汗が流れているのが分かった。

ハンスは息荒く、周りを見渡した。

既に眼前に迫っていた白い手は、最初からなかったかのように消えていた。

「どうした？ ぼーっとして」

ラトフは不思議そうな顔でハンスを見ていた。その隣でハーティも同じような顔をしている。

そんな二人に大丈夫だと告げて、ハンスは大きく深呼吸をして荒い息を整え、もう一度ケースを見やった。

もはや何かがいる気配は無い。

ひっそりとケースに剣が入れてあるだけ。先ほどの光景となんら変わらなかった。

ハンスは額に手をあて、一際深く息をつく。

「なあ」

ハンスが言うと、再び打ち合わせ染みた会話をしていたハーティとラトフは同時に振り向いた。

ラトフはなんだ、と言うような顔でハンスを見やった。

「そこに誰か、いなかったか？」

ハンスがそう言うと、ラトフとハーティは怪訝そうに顔を見合わせ、同時に首を横に振った。

それを見たハンスは、そうだよな、とまるで分かりきっていたかのように呟いた。

『ステップ・オン・ザ・ガス』第六話

1 .

二人はハーティと別れ、休憩室にやつてきていた。そろそろ時刻は夜に差し掛かっている。盗賊が動くとしたら、恐らくは人も少なくなり身も隠せる夜半になるだろう。

今日一日はここに缶詰めだろうから、体を休めておこうというラトフの提案によるものだった。

「おい、ハンス大丈夫か？」

「ああ、まあ大丈夫だ」

そう言うラトフの顔は若干心配そうに見える。仕事帰りのハンスをここに引つ張つてきた負い目というのを少し感じているのかもしれない。

ハンスはそれに生返事で答える。言うてから、自分の口調が思ったよりぞんざいなことに気がついたが、気にしている余裕は彼にはなかった。

さっきのはなんだったのか。

ハンスの頭の中を、ただそれだけがぐるぐると回っていた。

あの後保管庫を歩き回つてみたが、当然ながら一人一人が隠れられるようなスペースなど存在していなかった。

それに、あそこには頑丈な鍵が施されているのだ。

普通の人間が手に入れることができないそれを、ハーティが慎重に外すのをハンスも見ている。

この美術館にとっては命のような部屋であるのだから当然だった。絶対に忍び込むなど不可能のはずなのだ。

じゃあ、あれは何だ？

先ほどの光景が自然によみがえる。

紫色の腰まで届くような髪をした、美しい女。

まるで彫像のように整った顔立ちだった。

そう、彫像のような。

思い返せば、彫像のように『生きている』という実感、いわゆる生命感が希薄。

ハンスにはそう感じられた。

一体何処から、どうやって現れたのか。

見間違いだと自分を無理やり納得させてもいい。幻覚でも見たのだと切り捨ててしまってもいいかもしれない。

しかしハンスにはどうしてもそうは思えなかった。

それだけ、あの光景は鮮明にハンスの中に入り込んだ。

生命感は無さそうなのに、存在感はある。

おかしな話だ。ハンスは苦笑した。

着ていた白いワンピースのような衣服に負けない程に白い肌。鼻先まで伸ばされた、真っ白い両手。

何で俺に手を伸ばしたんだ？

ハンスは、普段ならば軽々と否定するであろう可能性を、今回ばかりは肯定しかかっていた。

アレは『人ではない何か』なのかもしれない、と。

いくら頭は回らなかるうとも現実と非現実の違いくらいはつくつもりだったのだが。

ハンスは後ろ頭をがしがしと掻き毟った。考え込むと出てしまう、彼の癖だ。

しかし、怖いとか恐ろしいとかそんな感じは受けなかった。

その両手で頬を包まれそうになった時、寧ろ暖かいような感じを受けたのだ。

ハンスは体をソファに投げ出し、首をだらりと背もたれに預けた。こうして座ってみると、『ティルヴィング』のソファよりも上質のようだ。一端体を埋めると、もう立ち上がりたくなくなってしまう。

うような心地よさだった。事務所に欲しいな、とふと思った。

「なあ、ラトフ」

ハンスはそのままの姿勢で、ラトフの方を見ずに言った。ラトフは首だけをハンスに向ける。

「俺、心霊体験したかもしれない」

「……寝言は寝て言えよ、アホ」

ラトフは苦虫を噛み潰したような顔で吐き捨てた。予想通りの反応にハンスは苦笑した。

「だよな」

「疲れてんだお前は」

「どうやら、今日は厄日のようだ。予期せぬ仕事が始まってから、おかしなことばかり起こる。正直に言えば勘弁してほしかった。」

頭がパンクしそうだった。もう一度ため息交じりに頭を掻きまめる。思えば、これほど妙に悩んだことは未だかつてあっただろうか。しかし今は仕事である。

それも美術品防衛という、それなりに大き目の仕事。そちらに集中しなくては、便利屋ギルド『ティルヴィング』の名が泣いてしまふ。

目星はついていてるのだ。手がかりは自分の勘だけだが、ハンスは自分の勘は最大限に信用することにしてる。

「あー……」

ハンスは間拔けな声とともに、一際深い深呼吸をした。

ひとまず切り替えなければならない。さっきのことは今一時だけ、隅の方に無理やりに追いやっておくことにした。

丁度その時。

休憩室の扉を開けて誰かが入って来た。

二人がそちらに目を向けると、そこには従業員らしい風体の男がいた。きつちりと黒を基調としたスーツを着こなし、清潔感に溢れている。

その手には盆を持っており、二つの湯気が立つカップが載せられていた。

「お疲れ様です。コーヒーをどうぞ」

男はそう言いながら、驚くほどきびきびとした所作で、二人の前にあるガラステーブルにカップを置いた。

湯気と共に香ばしい香りが二人の鼻を刺激する。

ハンスはただ無表情、無言。どこか睨むような視線でその様子を見ていた。

彼の隣ではラトフが気が利くねえ、と呟いたのが聞こえた。

彼は無類のコーヒー好きである。どうやらここの出すコーヒーの味が気に入ったらしい。

男はすつと礼をして、整然とした歩みで扉の外へと出て行った。  
「奴だ」

ハンスはラトフの方を向いて呟いた。ラトフは驚いて、口に運ぼうとしたカップを思わず止めた。茶色い水面がゆらゆらと揺れ、危うく零れそうになる。

「アランダ。俺を見てた奴」

茶色の髪を後ろに撫で付けた、長身の男。

ラトフは目を丸くして、数秒間ハンスを見ていた。そして隣のカップに目を移す。

ハンスはそれに指一本触れてもいなかった。

ラトフの観念したような溜息がハンスの耳に入った。

金色の前髪をかき上げ、無類のコーヒー好きは自身のカップをテーブルに置きなおした。ハンスが少し驚きながらカップを見ると、一口も飲んでいない、手付かずの状態だった。

「ハンス」

「ん？」

「お前に賭けてやるよ」

ラトフはニヤリと、実に楽しそうに笑ってそう言った。

2 .

『彼』の前には、人間などは矮小なのだ、と改めて実感させられる。

直接相対したことは数えるほどしかないが、それだけでも本能的な畏怖を刻む込まれるに足るほどだった。

あらゆる物を凌駕する力。全てを覆い尽くす力。全てを可能にする力。

『彼』には全ての力がある、そう思わされる。

それも当然かもしれない。

『彼』は、世界そのものなのだから。

そしてその持てる全ての力をして、『彼』は邁進する。その過程においてさらに力を求め続ける。

全てを『一つ』にするために。

『彼』の下に、全てを帰すために。

本来の姿へと、全てを戻すために。

そして、自分を含むその他の人間全ては、『彼』の前にはただの駒でしかないのだ。

3 .

漆黒のローブに身を包んだ男が、闇にまぎれるように歩いていた。手には黒革の手袋。靴も黒いブーツで、全身が闇に溶けていた。

すでに時刻は夜半を回っているため、最小限の明りしかついていない。

そのおかげで視界も悪い。しかし男にとってはさしたる問題では

なかった。

ここの勝手は知っている。その為に長い期間を潜伏にあてたのだ。

狭い通路を直進し、どんどんこの館の奥へと進んでいく。彼の靴音が通路に反響している音だけが響いていた。

男は黙々と歩きながら考えていた。

思えば今日まで妙な団に籍を置き、協力関係を取り続けていたのも、館の中に潜り込み雑用をこなしていたのも、今日のためである。そう思うと、訳もなく興奮の感情が沸き立ち、胸のあたりが躍った。

何事も成就の瞬間とは、興奮を掻き立てるものなのかもしれない。淀みなく男の足は進む。

頭の中に刻みこめるほど何度も歩いた通路だ。男には、目を瞑ってもたどり着ける自信があった。

館長ハーティの方針により、衛兵は入り口の方に集中しているらしい。まず中に侵入させないことを第一目標としているようである。

ゆえに館内に待機している者は、比較的少ないようだ。ここまでは予定は順調に進んでいた。

すでに便利屋共にも対応策を施してあった。かなり大味の策だが、背に腹は代えられない。

これに関してはうまくいっていることを願うしかなかった。

後は、『あれ』をこの手にするだけである。

『ラヴィアンス』を。

一つの扉の前で、男は止まった。

そして懐に無造作に手を入れて、飾り気のない短剣を取り出した。

男は手袋をはずし、その短剣の柄をしっかりと握る。自分の中にある力の流れを剣に乗り移らせるように。

これを扱うのには毎回毎回肝を冷やす、と男は心の中で呟いた。



下手をすれば意識を失う可能性もある。だが、それを補って余りある効果があるのも事実であった。

すると、うつすらと薄く赤い膜が剣を覆っていく。同時に、若干男の体の重量が増えたような感触を覚える。

それを見届けた男はゆっくりと刃を錠に近づけて

「よう、また会ったな」

声が響いた。

男は弾かれた様に、発生源を振り返る。

男の目には、そこに二人の男が映る。

ゆっくりとした、余裕のある歩みで近づいてくる。

剣を提げた茶髪の少年と、背の高い金髪の青年。先ほどの声は前者から発せられたようだった。

「こんな夜中にどうしたよ？ アランさん？」

金髪の青年、ラトフが口元をにやりと上げながら言った。明らかにからかっている調子だ。

男、アランはそれには反応せず、ただ顔を強張らせたままで自問していた。体はぴったりと停止していたが、頭の中だけはぐるぐると回転していた。

何故だ。こいつ等も眠っているはずじゃないのか？

「さつきはコーヒーの差し入れありがとう。だがまあ、睡眠薬入りはさすがに遠慮するぜ」

ラトフは終始笑みを崩さずに言った。

実際、あのコーヒーを飲まなかったのはハンスのおかげであるのだが。

ハンスの勘をあてにしてコーヒーを飲まずにおいたところ、他の便利屋がそろって床に転がっていたのを見て確信したのだった。

その後は、敵の狙う本命の場所に出向き、今に至る。

「……なるほど」

アランは低い声で呟いた。この二人は彼が用意した睡眠薬入りの

差し入れを飲まなかった。対応策は失敗していたか、と心の中で呟いた。

「さて、じゃあ……」

大人しく来て貰おうか、と口にしようとしたハンスは最後まで言い切れなかった。

アランが恐ろしく機敏な動きで跳び出した。

隣に立つラトフの腹に黒い靴がめり込む。

アランがラトフを蹴り飛ばしたのだ。

受け身を取って床に転がった彼に向け、ラトフ、とハンスが叫んだ瞬間、アランが短剣を振り上げながら飛びかかって来た。

ハンスは瞬時に向き直って腰の剣を抜き放つ。振り下ろされた短剣を自身の得物で押さえた。

金属同士がぶつかり合う、高い音。通路に反響し、響き渡る。

「やっぱ大人しくは捕まらないよな。じゃなきゃ面白くない」

「……」

にやりと笑って言ったハンスの言葉には答えず、アランは無表情のまま短剣を握っていた。

ハンスは剣を握る両手に力を入れ、前方へとアランを押し返す。その勢いのまま、アランはバックステップでハンスと距離を取った。

ハンスはその様子に首を傾げる。

自分から斬りかかってきたにしては、あっさりと引きすぎている様な気がした。

打ち込んできた剣撃にも、重さはあまり感じられなかった。

だがさしたる問題ではない。ハンスはそう自分に言い聞かせることにした。

「いてて……無駄なことは止めとけよ。二対一だぜ？」

「ラトフお前、大丈夫か？」

「畜生が、俺としたことが……一世代の油断だった」

立ちあがったラトフが、大袈裟に悔しさに顔を歪めながら言った。

彼の手には彼自身が相棒と呼ぶ銃が握られていた。

黒光りする、六連発式リボルバー。

その銃口はしっかりとアランを捉えている。

『ミスティル大陸』では銃の生産は盛んではない。出回っている物の殆どが、他大陸から仕入れられた物だ。ラトフのそれは部品だけを馴染みの貿易商人から譲り、彼なりの研究を重ねて組み立てた、まさしく『相棒』なのだった。

「くくく……」

ハンスとラトフは同時にぎよつとした。

アランが、突然に不気味な笑い声をあげていたのだ。

この状況で笑っている、という事実も十分驚きに値したが、何よりその様子が二人には奇妙に見えた。

それは心底おかしい、といった風な笑い声では無い。喉の奥からしぼり出たような不愉快な、他人を見下したような笑いだった。

一筋縄ではいかないな。

ハンスとラトフは同時に肌で感じていた。

「なるほど二対一か。確かに、今はそうだな」

アランは笑いながら続けた。

そして、素早く懐に忍ばせた懐中時計を盗み見る。

刹那。

二人の背中を、何かがうごめく気配が襲った。

『ステップ・オン・ザ・ガス』第七話

1 .

「……何なのこれ」

アニーは目の前の光景を見て呆然と呟いた。

彼女の目の前で、ロビーの白い床に数名の男が折り重なるようにばったりと倒れているのだった。

近寄ってみると、どの男も屈強な体躯をしており、武器を所持しているのが見て取れた。

出血や外傷も見える範囲では無いようだ。胸がわずかに上下しており、呼吸もしている。死んでいるわけでは無さそうだった。

腰を折り顔を近づけてよく見てみると、彼女の耳に規則正しい息遣いが聞こえてきた。どうやら寝ているらしい、とアニーはその時初めて気がついた。

全員便利屋ね、とアニーは内心で呟いた。彼女はこの上なく冷静だった。

時刻が時刻のため、もう館内に観覧客の姿は無くなっている。今は入り口や他に侵入の可能性がある場所を衛兵が固めている中で、職員が今日の後始末と明日の準備に追われていた。職員ならば規制の制服があるようだし、それは衛兵でも同じである。

いったい何が……？

ちら、と視線を床に移したところ、中身の零れたコーヒーカップが転がっているのが目に入った。

コーヒープレイク中に居眠りでもしたんだろうか。もしそうなら随分呑気な連中である。ますますもってわからない、と呆れたようにため息をついた。

そういえば、とアニーは思い返した。

自分の所にも従業員らしき男が、湯気の立つコーヒートを差し入れ

に来ていた。いかにも紳士という感じの身のこなしでアニーにカッ  
プを勧めて来たのを思い出す。

そういえば飲んでないな、とアニーは呟いた。コーヒーより紅茶  
派だということもあるが、単純に飲みたい気分ではなかっただけな  
のだが。

盗賊団など来るわけがない、もしくは来ても大したことは無い、  
という余裕のつもりなのだろうか。

アニーも一番初めに話を聞いた時には、他人事のようにそう思っ  
たものである。悪戯ではないか、というのが第一印象であった。

しかし仕事は仕事。現にここに来てしまっている以上、気を引き  
締めていなければならぬ。

アニーは非難めいた視線を眠りこけている男達に向けてから、踵  
を返した。

彼女は先ほど、館長のハーティという男から今回の護衛対象と対  
面させられていた。『剣』を展示するなど酔狂だ、とは思ったが報  
酬をもらう以上、やるべきことはやらねばならない。今回の物の元  
へ向かおうと思った。

すると、反対方向から歩いてくる人間が、アニーの目に入った。  
どうやら女性のようなうだ。歩きたびに揺れる長く黒い髪がぼんやり  
と目に映る。

黒いローブを羽織っているようだったが、よく目を凝らしてみる  
とその下には黒と白を基調とした制服を着ているようだ。

妙な格好だ、とアニーは思った。しかしそれ以上は特に何の感慨  
も抱かず、通り過ぎようと歩を進めようとした。

しかし次の瞬間、アニーは反射的に跳躍した。

金属が床に当たった、甲高い音がアニーの耳に届いた。

「……何のつもりかしら？」

靴音を鳴らして着地すると、アニーはその青い目を鋭く尖らせて、  
黒いローブの女をにらみつけた。

女の手には湾曲した刃を持った剣。

何のつもり……？

アニーの言葉には返事をせず、女は再度剣を構え切っ先を真っ直ぐアニーに向ける。

目の前に立つ女から放たれる威圧感が、ぴりぴりと肌を打つ。

素人では無い。アニーは肌で感じ取った。

やるしかないか、とアニーは心の中で呟き、背中 of 槍を手にした。

2 .

右、左と交互に剣を降り下す。しかし、アランの持つ短剣は、まるで吸い寄せられるように正確に動いてそれを弾く。

ハンスは思わず舌打ちをし、後ろに跳んで相手と距離を取った。

素早く周りを見渡せば、アランと同じように黒いローブを羽織った男が六人ほど確認できた。

それと同時にハンスの後ろの方から破裂音が響き、漂ってきた独特の臭いが鼻をつく。間髪いれずに黒いローブの男一人がぐぐもつたうめき声をあげて倒れた。ラトフの相棒が火を噴いたらしい。

あと、こいつを入れて六人、か。

ハンスは目の前の男を睨みながら、内心で呟いた。この狭い通路で五人も六人も相手にするのはいささか骨が折れそうだ。

アランを追い詰め、ハンス達にとって有利であつたはずの形勢は一気に不利に傾いていた。

あの後、ハンスとラトフがうごめく気配に振り向くと、そこには各々の武器を持ったローブの男達が立っていたのだ。

二対一から、二対六。

用意周到だな、とハンスは漠然と思っていた。彼にとっての最終手段なのかもしれないが、やはり一筋縄では行かない相手らしい。

しかし『盗賊団』を名乗るなら、それくらいでなければ、とも同時

に感じていた。

「はああ！」

咆哮と共に、アランが踏み込んでくる。腹部を狙って、下段から斬り上げるように振るわれた短剣を、水平にした剣で受け止めた。そのまま上に押し出すように力をいなし、空いた胴を素早く薙ぐ。しかしアランは軽い後ろへのステップを踏み、ぎりぎりの所でハンスの剣は空を斬った。

次の一撃を狙おうとしたハンスは、反射的に転がるように横へ跳ぶ。

背後に気配を感じた瞬間には反射的に体が動いていた。案の定後ろに迫っていた男の剣は、空を斬っていた。

挟み撃ちか。

素早く立ちあがり、剣を構えた瞬間。

再度破裂音が響く。

そしてそのすぐ後に、黒いローブの男が肩を抑えながらばたりと倒れる。

「油断してんじゃねえぞ！」

破裂音の主はすでにハンスの方を向いてはおらず、声だけをかけてきていた。

ラトフは右に愛銃、左にナイフを手にしながら、三人の黒ローブと対峙しているようだった。この狭い通路で乱射してしまえばハンスを誤って撃ちかねないためだろう。

後ろに気づいていないハンスを見かねて、右手の愛銃の引き金を引いたのだ。

「……お前もな」

ハンスは薄く笑って呟いた。ラトフの耳には入らなそうな声量だった。

しかし、とハンスはアランの短剣を防ぎながら考える。アランだけに集中するわけにもいかない。現在残っているのは見た限り、アランを含め四人。

先に周りを潰そうか、と考えて、即座にその考えを否定した。アランを自由に動ける状態のまま放っておく方が後々面倒になりそうだ。

ハンスの視界に二人。

今度は二人同時に斬りかかってきた。一人は正面からハンスの剣を抑える事を狙い、もう一人は側面への斬り込みを狙う。

ハンスは慌てずに、真っ直ぐに振り下ろされる剣を力を込めて弾き返す。

そして素早い動作でしゃがみ込み、そのままくりりと時計のように回転。目の前の黒い足を斬りつける。

ハンスのその動きが予想外だったのか、もう一人は一瞬呆気にとられた様に動きを止めた。

ハンスはそれを見逃さず、呻き声を上げてしゃがみ込む男から瞬時に目を離し、向き直って袈裟斬りを見舞う。

血飛沫と共に男が倒れるのを最後まで見送らず、ハンスは剣を構える。

息をつく間もなく、剣に重い衝撃が届く。

数瞬も遅れずにアランが斬り込んできていた。

「くっ、小僧……邪魔を……！」

「邪魔すんのが俺らの仕事なんだよ！」

ぎりぎりとお互いの剣同士をぶつけ合いながら、吐き捨てる。

やはり強い、とハンスは実感していた。

リーチではハンスの剣の方が勝っている。しかし、アランの常人の枠を超えた軽やかな身のこなしが、そのリーチの差を埋めている状況だった。懐に入られてしまえば、短剣の方が小回りが利く分スピートで不利になってしまう。

その時、ハンスの耳に不愉快な声が届いた。

眉根を寄せ、ぶつかり合う剣を挟んだ向こう側の男を睨みつけた。

「ククク……」

再び、笑っていたのだ。



にやりと口の端を上げ、氷のように冷たい目を細めながら。

「ククク……私の勝ちだ、小僧」

アランは勝ち誇った調子で呟いた。

何だ？

ハンスには、一瞬赤い光が見えた。

次の瞬間、ハンスは大きく目を見開いた。信じられない、という感情が顔に浮かびあがる。

「少しお前を見くびっていたようだ。だが、武器が無くては……」  
ぼろりと、まるで木の枝が折れる様ようだった。

ハンスは呆然と、床に落ち行く金属の塊を見つめていた。床に落ち、からんからんと小気味の良い音が通路に響き渡る。

彼の右手には、柄と切っ先のない刀身だけが残っていた。

「戦えないだろう？」

「……くそつ、何した!？」

「言ったところでお前には理解できんだろう……さて、そろそろ仕上げに入らせてもらおうか」

アランがそう言うと、再び気配。

ぞろぞろと、黒い影が姿を現す。

まだ現れるのか、とハンスは苦々しく呟いた。

「まだ来やがるのか……!」

ラトフが、息の上がった声で悪態をつくのが聞こえた。ハンスがすつと視線を流すと、彼の周辺に三人の男が倒れているのが見えた。彼は彼でうまくやったようだ、と若干ほっとした。

「あれで全員だと思ったか。万一のために待機させていたのだ。本来ならば一陣も二陣も使わずに終えたかったのだが……」

仕方があるまい、とアランは呟く。

勝利を確信しているためか、ハンスにはどことなく上機嫌な声色に聞こえた。

間髪入れず、ハンス達を挟みこむように黒いローブの男達が走り寄る。

ハンスは瞬時に視線だけで数える。数は六人。

屈強な体から胸を狙って突き出された剣を、ひょいと身を捻って避ける。その後ろに続いて真っ直ぐ振り下ろされた剣は横に跳ぶ。アランはその様子を見もせず、再び短剣に力を集中していた。赤い膜に包まれる剣身。

「くそっ！ ラトフ！ ナイフ貸してくれ！」

「一本しか持つてねえよ！ つーか、てめえには剣があるだろうが！」

間断なく繰り出される剣撃を、持ち前の身体能力でひょいひょいと避けながらハンスが叫んだ。

ラトフも気が立っているせいか、返す口調がかなり荒っぽくなっている。しかし二人にはそんなことを気にしている余裕はなかった。

「折れたんだ！ とゆーか、折られた」

「折れた！？ 安物使ってるからだろうが！」

「安物しか買えないんだから仕方ないだろ！」

いつの間にかどうでもいい口喧嘩になっている。ハンスはくそ、と再度悪態をついた。

さすがに素手で剣を相手にするのはこの上なく不利だ。ナイフでもあればどうにかなるかと思っただが、それも駄目らしい。

仕方がない、とハンスは床に転がる剣を拾い上げる。

他人の剣で戦うのは心許無かった。柄を握ってみるとやはり手に馴染むような感覚が無く、どこか扱いづらく感じる。

だがこの状況では四の五のと言っていられない。

覚悟を決めるか。

ハンスは呟き、目の前に迫る男相手に身構えた。

するとその瞬間。

今まさに、ハンスに斬りかからんとしていた男が吹き飛んだ。

ハンスが呆気にとられて吹き飛んだ男が立っていた所を見ると、見覚えのある金髪が揺れていた。

手に持った自身の身長程もある槍で、男を殴り飛ばしたらしい。

清楚な見た目と違い、かなり豪胆だ、とハンスは口には出さず思った。

「賑やかだから来てみれば……」

「あ！ お前は……！」

ハンスは記憶の引き出しを手当たり次第に引く。

「あなた達、何やってるの？ どういう状況なの？」

左手を腰に当てた、凜とした姿勢で彼女は呟いた。

「えー………そうそう！ アニーだ」

「随分時間かかったわね……忘れてたんでしょ」

「いや、思い出すのに時間がかかっただけだ」

アニーは少し呆れたような顔で、それって忘れてるってことですよ、と呟いた。

錠が力に耐えきれず、両断されていく。一つまた一つと。

後ろの喧騒はさらに激しさを増していた。どうやら便利屋がまた一人増えたようだ。

しかし、問題は無い、とアランは確信する。

もともと、この館内に潜り込ませていた男達は時間稼ぎのために使う予定だった。不測の事態が発生し、この錠前を破って『ラヴィアンス』を手にするのが予定よりも遅れた場合は第一陣。それよりもさらに時間がかかる場合は第二陣。

邪魔者を消すのは、今のアランにとって第一目的では無い。『ラヴィアンス』を手に入れることこそが、至上の目的なのだ。

最後の錠が落ちる。

アランはちらと、肩越しに後ろの様子を見やった。

金髪の槍を引っ提げた女が乱入し、暴れているようだ。槍のリー

手を効果的に生かして、相手のリーチ外から打撃や刺突を見舞う。一目で、よく鍛錬されていることが見て取れた。

金髪の男の方は動き回る相手に業を煮やしたのか、ナイフでの肉弾戦に移行しているようだ。それでも、さすがというべきか動きは素人では無い。

そして、あの茶髪の小僧。

わずかに刃を交えただけで、多少荒削りだが剣技は天性のものを持っている、という印象をアランは受けていた。加えて武器を折られたくらいでは挫けない負けん気もあるらしい。

面倒な奴らに出会ったらしい、とアランはため息をついた。

しかし、これで終わりだ。彼の狙いは成就する。

アランの用意した戦力は一人また一人とやられているようだが、勝敗など全く期待していない。あの三人の注意をアランから反らし、持てる全ての力を以て時間を稼げばいい。彼らの存在意義はただそれだけに限られていた。

『ラヴィアンス』さえ、手に入れば……。

アランは自然と自分の口元が綻んでいくのがわかった。もしこんな緊急事態でなければ、大声で笑い飛ばしてしまいたかった。

波状攻撃に対する迎撃に手いっぱい、便利屋達はこちらまで手が回らないようだ。たかが三人では、仕方がないだろう、とアランは心の中で呟いた。

もはや彼に失敗の恐れなど一片も無かった。

知らずに、笑い声が口から漏れる。

冷たいドアノブに手をかける。

アランは勢いよくそれを引っ張り、部屋の中に滑り込むように侵入した。

ガラスケースの中に、一本の剣がひっそりと置かれているのが彼の目に入る。

これでやっと……。

アランは笑い声を洩らしながら、その輝かしい剣を見つめていた。

『ステップ・オン・ザ・ガス』第八話

1.

「で、名も知らねえ便利屋さん……アニーとか言っただけ？ あんた戦えるのか？」

「もちろん」

アニーは言いながら、背後から近づいてくる男の腹を穂先とは逆の柄頭で突く。そして瞬時にくるりと向きを変え、頭に柄の一撃を加えて昏倒させる。

「そりゃ頼もしい」

ラトフは目を見張って答えた。

二人の声を背中に聞きながら、あつ、とハンスは叫んだ。

頑丈に閉じてあるはずの扉を開け、部屋の中に滑り込む黒いローブ。

斬り落とされたのか、無残に両断された錠前が床に転がっている。

ハンスは、その姿を確認した瞬間にはすでに走り出していた。

床に転がる男達の体を跨ぐ。最短距離で扉へと走り寄る。

進路を塞ごうと割り込んでくる男達を、右に左に飛んで避ける。

最後に扉の前に仁王立ちになったのが一人。

邪魔だ、とハンスは内心で叫んでいた。

ハンスはその勢いのまま、体ごとぶつかると同時に剣を振るう。男は防ごうと自身の剣を構えるが、間に合わない。

肩口から鮮血が上がり、男が片膝を突いた隙にハンスは扉の中に走り込んだ。

「ハンス！ しょうがねえ、そっちは任せる！」

「……よく分からないけど、行ってきなさい」

ハンスの後ろから二人の声が聞こえる。ハンスは返事にまで気が回らず、にっと笑顔で答えた。

滑り込むと、一度来たことがある部屋の光景が目に入る。飾り気は無く、ただ多くのガラスケースに入れられた品を置いておくだけの殺風景な部屋。

ハンスは走り込んだ勢いそのまま、黒い後ろ姿に向けて剣を横薙ぎに振るう。

アランは首だけを動かしてハンスの姿を確認すると、横に跳んで剣撃から逃れた。

「……しつこい男だ」

アランはそれだけ言って、短剣を再び構える。その目には静かな怒りが映る。

まずハンスが動く。

「おおお！」

目の前のガラスケースを蹴飛ばしてどかし、咆哮と共に斬りかかる。

退いたら負けだ。

奴よりも速く、打ち込む。

ハンスの頭はただそれだけでいっぱいになっていた。

アランはそれを避ける仕草は見せず、短剣の腹に左手を添え、両手で抑える。

先ほどの一撃よりも、強くその短剣を打つ。

押し合いになりそうなのを確認し、ハンスはとんと地面を蹴って後ろに跳んで距離を取る。

そしてまた再び一歩踏み込み、下段を狙って剣を振り上げる。

アランはそれを見て横に軽くステップ。

素早く身を転じてハンスの胸へ目掛けて短剣を突き出す。ハンスはそれを剣の腹でかろうじて受け止めた。

刹那。ハンスには、短剣が一瞬うつすらと赤く光ったように見えた。

「先ほども言ったろう」

短剣の先が触れていた部分が、ゆっくりとひび割れる。あっ、と

ハンスが叫んだ頃にはすでに遅かった。

「私の勝ちだと」

乾いた金属音が部屋に響き渡った。

奴は何をしたんだ!?

ハンスの思考は混乱をきたす。こめかみを大粒の汗が流れる。

再度武器を失った焦りと、それを二回も引き起こしたアランへの疑問が絢交ぜになる。

そんなハンスを余所に、アランはそのまま短剣を突き出す。

ハンスの左の脇腹へ。

ぐさりと突き刺さる。鮮血が飛び散り、床に小さな溜まりを作る。

「ぐっ……」

燃えるような激痛が走る。意思に反して、ひとりでに口から呻き声が出ていた。

咄嗟に身をよじったおかげで致命傷は避けられた。しかし、頭为天辺からつま先までに響くほどの衝撃がハンスを襲う。

その様子を見て、ふん、と鼻を鳴らしアランは短剣を引き抜こうとした。

しかし、その瞬間目を見開く。

動かない。

「……何？」

右手に力を込める。

しかし、アランの短剣を持った右手が動かせないのだ。

元凶はハンスの両手。

彼の右手を、がっしりとハンスが両手でしがみつく様に掴んでいた。刃の折れた剣はすでに地面に投げ捨てられている。

「貴様……！ 手を放せ！」

「放すかよ…… やつと捕まえただ……」

ハンスは額に汗を滲ませながら、尚も不敵な笑みを浮かべた。

その様は、見た者に畏怖のようなものを感じさせるような。

アランでさえも、一瞬体の動きを止めてしまつほどの威圧感。アランはハンスの腕から逃れようと右手を力強く引くも、びくともしない。

この細腕のどこにこんな力があるのか。アランは驚嘆していた。ハンスはアランの右手を掴んだまま、左膝をアランの腹にぶつける。空気と共に呻き声が吐き出される。

まだ、右手は放していない。

一息の間も無く今度は体を限界まで捻り、右足を振り上げる。左半身に鈍い痛みが刺す。

しかし、ハンスは気にも留めずに、叫んだ。

「吹っ飛べ！」

ふくらはぎがアランの体にめり込むのと同時に両手を放し、そのまま足で相手の体を押し出す。

「ぐう……！」

アランはくぐもつた声を発し、地面を転がる。

彼の体は散乱するガラスケースに激突し、耳障りな音を立てる。

「はあ……はあ……」

ハンスの息遣いが荒くなって来ていた。額に垂れる汗を拭う。無意識に傷口を抑えている左手が、ぬめりとした感触を覚えていた。

だんだんと体が言うことを聞かなくなってくる。

血が足りないのだ。腕や足が徐々に鉛のように重くなっていくような感覚に襲われる。頭もだんだんとぼうつとしてくる。

倒れるな……。

ハンスは自分自身に対し、呪文のように呟いた。

武器は折られた。

傷も負わされた。

対してこちらはアランに深手を負わせる事が出来ていない。状況は限りなく不利だ。

しかし、とハンスは自身に念を押し出す。



倒れてはいけない。負けてはいけない、と。

体の動きは鈍ってきたが、まだ動けなくなつたわけではない。今も血は流しているが、死んでいるわけではない。

たとえ見苦しかろうと構わない。どんな無様な姿になろうとも、絶対に自分から負けは認めない。

絶対に、諦めない。

だろっ、親父。

ふっと一瞬だけ彼の知る世界最強の負けず嫌いの顔が浮かんだ。と、その時だった。

ハンスの視界の端に、何かが見えた。

「……………」

アランがゆっくりと、起き上がる。転がった際ガラスで切れたのか、身につけているローブの所々に傷が出来ていた。

しかしその時のハンスの注意はアランには向いていなかった。

一つだけ散乱せずに残されたガラスケース。その中で孤高に輝く剣。

そして、その隣に立つ、紫色の女。

また会ったな。

意識は出血のせいで朦朧とする。

ハンスその姿には全く驚きもせず、また警戒もせずにそう呟いていた。

たぶん彼女には聞こえていないだろう、と思いながら。

彼女は何者なのか。

先ほど頭を痛めた問題など、今の彼には何の意味もない。

柔らかな、温かな感触に包まれる。

彼女は彫像のような手を再び差し伸べていた。今度は両手では無く、左手を。

ハンスの体はそれに誘われるように歩きだす。

さつきまでの重さが嘘のように思えるほど、体は軽い。

先ほどの朦朧としていた時とは別の感覚がハンスを包みこんでいた。自分と、彼女の周りだけが世界から切り取られた様に感じられた。

立ちあがったアランが何かを言っている。

しかし、ハンスの耳には入ってこない。扉の向こうの喧騒も、同様だった。

だんだんと近づいていく。

開かれた手のひらに向かい、足が勝手に進んでいく。そんな感覚をハンスは覚えていた。

その手に、触れる。

温かいとも、冷たいとも感じない。そこに何かがある、という感覚すらない。

ハンスはその手を掴もうと、ぐっと右手に力を入れ、握る。

その刹那。

彼を包んでいた感覚が晴れていく。

喧騒が再び帰ってくる。しかし、不思議と体の軽さはそのままだった。

握ったのは、彼女の手ではなかった。

ハンスは目を見開いて、自身の右手を見る。

彼の手には一本の、剣。

『ラヴィアンス』。

ハンスはじつとその剣を見つめ、そして思う。

異常なまでに、手に馴染む。まるで何も持っていないかのように錯覚するほど。

「馬鹿な！ 貴様にそれを扱えるはずが……」

よつやくアランの声が耳に入る。

彼がうるたえた様子で叫んだのが聞こえた。ハンスはそちらに顔を向ける。

これなら……。

ハンスは確信する。根拠は無い。だが、確信できた。勝てる、と。

現実感が戻ってきたせいか、脇腹の傷が今頃になって痛みだす。しかし、痛がっている隙はない。一秒たりとも。

自らの体に鞭を打ち、地面を蹴ってアランに斬り込む。走る加速と腕の力を合わせて、剣を振るう。

「何故だ、何故貴様が、『ラヴィアンス』を扱えるのだ！」

ハンスの振るう剣撃を、アランは叫びながら弾く。弾かれたならその次。

休む暇も与えず、打ち込む。

手に吸いつく様だ。振るいながら、ハンスは思った。ここまで自らの手に馴染む剣がこの世に存在するのか。

目が覚めるような連撃に、ハンスの剣を防ぐアランの動きがだんだんと鈍る。

「……まさか、貴様は　！　適合……！」

アランが叫んだ瞬間、彼の右手の剣が弾き飛ばされる。驚愕に目を見開いた一瞬。

その後、ハンスは懐に滑り込む。  
一閃。

黒いローブの腹の部分に一文字の傷跡が残り、赤い飛沫が床に染みを作る。

口を大きく開いたまま、左手で傷を抱えるように抑えながら、意識を失い倒れていく。

「勝った……」

その様子をしばらく見つめながら、ハンスは小さく呟くと荒い息のままその場に座り込む。

だんだんと目が霞んでくる。体も、特に足に力が入らなくなっていた。

もう一度右手の剣に視線を移す。

おかげで、勝てた。

そう、誰に対して言ったのか自分でも分からない眩きを最後に、ハンスは意識を手放した。

2 .

ある洞窟。岩肌がむき出しの天井と地面。近くに地下水でも流れているのか、わずかにちよろちよろと水の流れる音がなっている。

地面からは、水晶のような石が無数に突き出ている。その色はまるで夕焼けのような橙。その放つ光が、洞窟内を昼間のように照らしていた。

そこに女性が二人。

一人は地面から突き出た小さな子ども程度の大きさの石に腰かけていた。

「……ええ、私の呼びかけに応えたようです」

「それでは……彼が？」

『彼女』は呟く。目の前に立つ燃えるような赤い髪の二人目の女性が、抑揚の無い声でそれに応えた。

「おそらくは、そうでしょう」

『彼女』は言いながら目を伏せる。長い前髪に隠れ、表情が読み取れなくなる。

そのまま目を閉じ、数秒が経つと、『彼女』の髪はこの部屋に満ちる光のように橙色に変わっていく。

「またそのように頻繁にお姿を変えられては……」

「戯れですもの。このくらい大丈夫です」

『彼女』が言つと、ため息を返される。

「……何か問題でも？」

「いえ、ですがやはり気が進まないと思って」

「彼に同情を？」

無表情で訝しげな声で問われる。それにいいえ、と首を振って応えた。

分かっている。自分には、そうする心など無い。全て真似事なのだ。

『彼女』は改めて思う。一体どのくらいの時が経ったのだろうか。世界は時と共に回っていき、そして変わっていく。自分には、それをどうする事も出来ない。多くの変遷を経験して、形作られたこの世界は。

しかし、それでも『彼女』はただ眠っているわけにはいかない。

『彼女』の役目を果たさなければならぬのだ。

ふと、真実を知った時彼はどう思うだろうか、と漠然と思った。

3 .

「……こっぴどくやられたなあ前」

「まあな。脇腹ぐっさりやられた」

ラトフは、目の前の光景を見てぼんやりと呟いた。ハンスは笑ってそれに応えると、動くなどアニーに小突かれた。

『ティルヴィング』の事務所。

ハンスがソファに白いシャツを掛け、上半身は裸で姿勢良く座っていた。細身だが引きしまった体が露わになっている。その隣にアニーが座り、膝元の救急箱から取り出した包帯を彼の傷口に巻いている。

ラトフは組合長マスターのデスクから椅子を勝手に引っ張ってきて、ソファの近くに腰かけていた。

「手慣れてるなあ」

「そう?」

ハンスが意外そうに呟く。アニーの手は淀みなく的確にハンスの傷口に白い布を巻きつけている。それを見ているラトフも、ハンスと同じ感想を抱いていた。

アラン一味との戦闘から約半日が経っていた。すでに外の太陽は高くまで登っており、何かの小鳥が鳴いている声が微かに聞こえてくる。穏やかな日中を思わせる響きだ。

保管庫での戦いでアランに勝ち、そのまま気を失ったハンスを見つけたラトフとアニーで彼をここに運び込み、ついさっき目が覚めたところだった。

「……で、あの後どうなったんだ?」

ハンスは欠伸を噛み殺しながら聞いた。

「当然、全員御用だよ。一人残らず警察に引き渡された」

「そういうこと。依頼は無事達成したわけね」

「そうか、ならよかった」

ハンスが気絶した後、アニーとラトフによる通報でアラン含む全員は逮捕され、護送されていた。二人の手によって、他の者も気絶させられていたために、取り逃しはないとのことだった。

「にしても間抜けな話だよな。必死に入り口守ってたら、敵は内部に潜んでましたってんだから」

「おまけに便利屋は殆ど居眠りだしな」

結局の所、アランを含め、十人以上もの賊があの日館内でチャンスをうかがっていたことになる。ハンス達以外の便利屋や、職員は睡眠薬入りのコーヒーをまんまと飲まされ、せっかく集めた人手は全く機能しなかった。当の館長のハーティが目を覚まし、事の次第を把握したのは全てが終わってかららしい。

笑えない話だ、とラトフは笑いながら言う。

「実質的に俺達しか働いてないんだが、他の連中にも報酬が割り当てられてるのがな」

「そりゃしょうがないだろ、ケチだなラトフは……悪いな、アニー」

ハンスはアニーに礼を言うと、シャツを頭から被りぐるぐると頭を振る。まるで犬の様な動きだ。そしてソファに背を深く埋め、そのまま寝かぬない体制になる。

「……で、だ」

ラトフが呟くように言った。

「アニー、お前なんでさも当然のように居座ってんだ」

「何？ 居ちゃ駄目なの？」

「いやそういう訳じゃないが……馴染んでるな、と思ってな」

ラトフとしても、別に彼女が信頼のおけない人物だと思って言っただけではなかった。ピンチの時に加勢してもらった事に対して、感謝もしていた。

しかし、ここに来るのはほぼ初めてのアニーが、ここにいるという事が随分自然に見える振る舞いをしている。それが純粹に不思議だったのだ。

「そう？ 結構居心地いいのよね、ここ。なんだか懐かしい気持ちになる」

そういうアニーの表情が、ふつと遠くなった様にラトフには見えた。

「そっぴや、お前なんであそこにいたんだ？」

「ん？ ああ、あれね……」

ハンスが思い出したように聞くと、アニーは薄い色の金髪を撫でながら説明した。

「あいつらの仲間に襲われてね。たぶん、私が眠ってないのに気づいて慌てて口を封じに来たのかもね……まあ、相手をしてたら逃げ出してね。追いかけたら、あなた達が暴れてたところについたのよ」

「で、返り討ちかよ？」

「やられた分は返さないかね」

「恐ろしい女だ……」

ラトフが呆れたように呟き、ハンスはそれを聞いて笑っていた。その矢先だった。

アニーがぼつりと、呟く。

「それに、ここにいれば分け前貰えるかもしれないし」

一瞬、ラトフは啞然。

そのすぐ後に、ラトフは椅子ががたん、と音を鳴らすほどの勢いでアニーに人差し指を差しながら叫んだ。

「お前はたんまり貰っただろうが！」

「でも私が居なければ失敗してたよね？ その分の功労を労われても罰は当たらないかなあってね」

アニーが途轍もなく眩しい笑顔で言い放った。ラトフはまるでジヤブでも食らったかのようにのけ反る。

「当たるわ！ 大体うちはクソ真面目な秘書さんが厳密な計算の下に分配するんだ。お前の分は無い！」

ラトフは指の先をアニーにびしりと向けながら言った。その後人を指差すな、と当人に押しつけられ、あらぬ方向に向きを変えられたのだが。

その必死の様相にアニーは笑って冗談よ、と返した。

「つたく、それこそ笑えねえ冗談だ」

「必死だなあラトフ……ああ、今回結構撃つてたからなあ」

「そうだ、一挺六発を全部使っちゃった。お前らには分からねえだろうけど、弾薬ってのは高いんだぜ？ 海の間こつから仕入れてんだから尚更だ」

はあ、とラトフはため息をつく。

ラトフにとっては弾薬費用は死活問題らしい。他愛もない冗談にも本気で突っかかる程に。そんなに費用がかかるなら何故銃を使うのだろう、とハンスは思ったが、聞かないでやることにした。彼なりに理由があるのだろう。

「そうだ！ 忘れるところだった」

「今度は何だよ」

アニーはひとしきり笑った後、急に叫んだ。それに反応し、二人は彼女の方に顔を向ける。ハンスは不思議そうな顔だったが、ラト



フは今度は何を言うんだ、と少し不機嫌な目で。

「こんなの、見たことある？」

アニーは言いながら、自分の右耳に両手を持っていくと、もぞもぞと動かす。

そして、二人に見えるように手のひらにそれを載せた。

金色に輝く三日月のイヤリング。

ハンスとラトフは揃って覗きこむようにそれを観察した。

「……いや、無いな。ハンスは？」

「俺もないなあ」

そう、とアニーは無表情で呟いた。

また振り出しか。

アニーは二人に聞こえないような小声で呟いた。

「で、それが何なんだ？ 正直、そういう装飾なら世の中に五万とあると思うが……」

「いいの、気にしないで」

アニーは笑って応えた。

と、その時。

ドアを控え目にノックする音が三人の耳に入った。

ラトフが俺が出る、と立ち上がり、ドアを開ける。

そこには一人の燃えるような赤髪の女性が立っていた。上から下まで白いローブのような服を着た、小柄な女性だ。その細い両腕で、まるで赤ん坊でも抱き締めているかのように、茶色い布の細長い包みを抱えていた。

「『ハンス・ターキンス』さんは、どちらで？」

ラトフが口を開く前に、女性は言った。

ラトフは息を飲んだ。ハンスを名指してきたことに対してでは無い。

目の前の女性の、凜とした声に。

有無を言わさぬ、威圧感すら漂うその声に。

「……奥に居るが？」

「会わせていただけですか」

こいつ……。

ラトフはちら、と中にいるハンスとアニーに視線を送る。

二人もどこかおかしな雰囲気を感じ取ったのだろうか。面持ちが険しくなっていた。

こくり、とラトフは頷き、彼らの運命を変える訪問者を迎え入れた。

彼女の持つ包みから、ちらりと剣の刃が　。

『ラヴィアンス』の刃が覗いていた。

第一部『ステップ・

オン・ザ・ガス』完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7430g/>

---

セカンド・ハート

2010年12月19日02時19分発行